

五月の文楽座人形浄瑠璃

竹本土佐太夫引退披露興行



乍憚口上

薰風やうくくに訪づれ耀やかしき新緑の頃と相成り申候
處市中皆々様には愈々御機嫌うるはしく御座被遊恭悅奉
申上候

然る處當座にては多年の間御引立を蒙り居り候竹本土佐
太夫儀此度引退を決意致し其の御披露興行として茲に豪
華番組を以て花々しく開演可致候處當人は元より出演連
中は此の晴れの舞臺を飾らん爲め殊さら出し物に選擇を
加え一座大努力を以て相勤め申候間何卒いつくにも
倍して一層の御同情を以て賑々敷御來場を賜はり度伏し
て御願奉申上候

五月 日

文 樂 座 敬 白

昭和十二年五月一日初日

初日二日目に限り 午後二時開演
毎 日 午後三時開演

・御 觀 覽 料・

一等席 御一名 金 三 圓

(一階座席五十錢上り)

二等席 御一名 金 一圓二十錢

三等席 御一名 金 五 十 錢

一等御座席(は五日前より
一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南[㊦]四七一一番
專用電話
一般御用 南[㊦]三〇三二番
の電話 南[㊦]三七八八番

お草履の準備は御座いますが、靴、
草履はそのまま御入場出来ますから
御便利で御座ります

文樂座人形淨瑠璃
竹本土佐太夫引退披露興行

鬼き いち 一ほら 法げん 眼さん 三りやくのまき 略まき 卷
 五條橋の段 三時 三時二十分
 (幕間十分)

祖父ハ山かづら へ柴がわ 菊れん 二りのしがらみ
 祖母ハ川くすのき へ洗濯むかし 二ばなし 楠くすのき 昔むかし 昔むかし 漸ばなし
 磯拍子の段 三時三十分—五時三十分
 徳太夫住家まで (幕間十五分)

竹本土佐太夫 野澤吉兵衛 引退披露口上
 五時四十五分—六時五十分
 (幕間十五分)

お半かづら 長右衛門がわ 桂川れん 連理りのしがらみ 柵りのしがらみ
 六角堂の段 六時二十分—八時五十分
 道行の段まで (幕間十分)

繪本えほん 太功たいこう 記き
 尼ヶ崎の段 八時十五分—十時五十分
 大徳寺焼香まで (打出し)



法有



けり

鬼一法眼三略巻

五條橋の段

辨牛

若丸 慶

辨牛

若丸 慶

吉田玉幸 桐竹紋十郎

人形

竹本相生太夫 豊竹呂太夫 豊竹辰太夫 竹本陸路太夫 竹本駒尾太夫 豊竹常子太夫 鶴澤重八 鶴澤友重 鶴澤寛五 野鶴八寛 鶴澤鶴太 鶴澤清太 鶴澤清次 鶴澤重次

この淨瑠璃は文耕堂長谷川千四の合作になるもので五條橋は全曲の第五段目にあたり初演は享保十六年九月十三日の竹本座であります鞍馬山に劍法を修業する牛若丸が五條橋に辨慶と出遇ひ組伏せてこれを家來にする條りです。

(床本) 五條橋の段

扱も源の牛若丸父の修羅の魂魄を慰めんと川風添ゆる夜あらしの夕ア程なき秋の空面白や心うき立御出立肌には練の御あはせ紅ひすそごの御きせなが糸かず織の大口に薄縁といふ御ばかせ五條の橋をさしてくる傘のしぶきも高足駄橋板とどろと踏なら

し行こふ人を待たまふ御有さまぞ不敵なる西塔の武藏坊辨慶は其頃都にありけるが五條の橋には人をなやます曲者有りとし聞しかばそれを從へ召遣はんと心も空もはるゝ夜の月も昔羽の山の端に出立つ鏝は黒かは鍼し好む所の道具にはくま手ない鎌鐵の棒さい槌鋸 鐵さす股さすまゝに権現より賜はつたる大雞刀真中取て打かづきゆらりと出たる有様いかなる天魔鬼神なりともおもてをむくべきやうあらじと我身ながらも物たのもしく手に立者のア、ほしやとひとり言して打わたり向ふをきつと見てあれば橋のほとりの青柳の糸より細き腰付にてすつくと立たる女すがた傘傾けておもはゆぶり辨慶元來法師の身女に何といひかけん詞もな

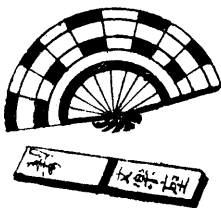
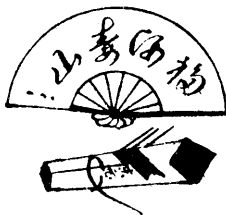
まめく氣色にはち橋のかたへを過ゆ
 けば若君彼をなぶつて見んと右へよ
 くれば右に立ち左りへ行けば左りに
 行ちがひさまに薙刀の柄をはつしと
 蹴上ればスハくせ者よ物見せんと薙
 刀柄ながく追取のべ切てかゝれば若
 君は薄衣取のけ打寄す。つるぎをあ
 ざむく傘は六十間の橋の上ひらり
 くくるくく車にもまるゝ牛若
 丸辨慶いらつて早足をふみ遁さじも
 のと切込を丁ど請たる勢ひは雨をお
 こせる蛇の目の傘風ふきはらへば飛
 かはしひらりと抜たる小太刀のかげ
 星のひかりと水車所は名におふ加
 茂川の流に立波どうくくくと
 寄すれば白鷺のあしべにあさる片足
 立すがたはつくばね羽子板の拍子は
 きぬたの音むそふ返しうつゝの太刀

二つの鏝音からくくらんかん傳
 ふさゝがにの蜘蛛のふるまひ木づた
 ふましら水の月かや手にたまらぬす
 がたをしたふ薙刀のゑたりやおふと
 しつかと取りゑいやと引けばゑいと
 ひく橋の振寶珠玉の汗鎧を削りて戦
 ひける辨慶秘術を盡せ共終に薙刀打
 落され組んとすれば切はらふ縄らん
 とするに便りなく詮方盡て橋桁を二
 三間とびしさり呆れ果て立たりける
 此辨慶に大汗かゝす汝は何者ホ、我
 これは源の牛若丸シタリ道理で大
 体の人でないと思ふた今より後は御
 家來コレ可愛がつて下さんせと頭を
 橋にぞ付けにける主従三世の縁の綱
 約束長き五條のはし橋辨慶と末の世
 に語傳へて繪にも書祇園祭の山鉾に
 も祝飾るぞめでたけれ。

各種扇問屋

戸田商店

大阪市南區道頓堀
 電話南⑦六九二番





くすのき

楠 昔 噺

礎拍子の段

礎拍子の段

豊竹駒太夫
鶴澤清二郎

人形

祖父母	祖父	祖母	團子	落武者	柴武	柴武	麥
徳太夫	小仙	賣	者	者	者	者	者
吉田玉次郎	吉田榮三	吉田小兵吉	吉田玉市	吉田多三郎	吉田瓢壽呂	吉田兵次	吉田兵次

この淨瑠璃は延享三年五月、大阪竹本座で上場した、並木千柳三好松洛竹田小出雲合作の「楠昔噺」全四段の中の三の切で、初演には竹本

此太夫が語つた。大体の趣向は、河内の國松原村の百姓徳太夫の後妻の連子おとはの入贅となつた楠正玄の子正作は、靈夢によつて後醍醐天皇に召抱へられて楠正成と名乗り六波羅の大軍を破り宇都宮公綱と雌雄を決せんとする。然るに公綱は徳太夫の實子竹五郎で、先年勘當され

であるのを悲しみ憤り、その妻が夫の勘當救免を乞ひに来つた時、老母と刺違へて公綱に大義名分を悟らしめやうとする。公綱は之れに感じ、且つ正成、藤房の忠義に動かされて終に官軍となるといふ筋で、この徳太夫の場は正成の奇計などを取込んで脚色した面白い作意である。

(床本) 礎拍子の段

むかし、其昔祖父は山へ柴刈に祖母は川へ洗濯にと子供すかしを今爰に、思ひ合せし河内の國、松原村に年を経て、身の達者な徳太夫、七十越し老の坂柴刈に行道連と、祖母も六十のみづはくむ、洗濯盥いたいで、鶴のみよくの友白髪、さそひ合たる、一連は殊勝にも又しほら

しく、祖母は川邊に盥をおろし、サ
ア親父殿はから山へ二三町怪我せぬ
やうにそろ／＼といてござれ其間に
わしも洗濯仕廻連立てにませう、
必／＼重荷を持まいぞ、やあのいや
る事わいの、重荷を持といやつても
膝節ががくついて持れぬ、若い者共
が刈て置いてよい程に荷をしてくれる
是といふも、聾の智慧を所の者が借
追従、おれ程仕合な者はおじやらぬ
畢竟山へ腹ごなしの遊び仕事、苦に
成程何の持ふぞ、つい一走り取て
こう、そなたも川で怪我せぬ様に、
洗濯仕廻待て居や、オ、おれが事苦
にせず共、七曲ですべらぬ様に、ソ
リヤ氣遣ひおしやんなと云つゝ別れ
生駒山、平岡山のつゞらおり、杖を
力に老の足、實槽特の峯を分、難行

有し身の上思へば念佛かみませでた
とり、行こそわりなけれ、かげ見ゆ
る迄祖母は見送り、いとしや去年迄
あの様な足元ではなかつたに、一年
々々よわりが見へると思ふも同じ老
の身の、仕廻事して戻をまとも、流
におりて洗物、揉洗より踏洗と、川
邊の石を藁にしていかに柄杓のかけ
水も、ざつと打てばとん／＼、
サツサとん／＼、サアとん／＼サア
とん／＼、碓拍子や三ツ拍子水さわ
やかにかけ流す、柴刈友の一むれに
通りかゝつて、こりや徳太の婆様精
が出ます、手利ではない足利と笑ふ
て行をコレ／＼皆の衆、明神坂はす
べりはせぬかちさまは後へ見へるか
のととへば口々、追付愛へもうそこ
へと、山路の友のしほらしく、ゆび

さし教へ行過る、老木の松の枯枝に
肩を借、背を借て下る坂道、とぼ
／＼と、歸り來るを祖母は見るより
ヲ、イ待て居る／＼、思ひの外早か
つたと、いふをちからにあゆみ寄、
そなたはまだ洗濯仕廻ずか、イヤま
だ／＼、そんなら幸一休と、どつ
さりおろす柴よりも、腰打音がひゞ
きける、ほつと息つき、エ、年は寄
まい物、二三年前迄は廿貫目程宛背
負ふ人にも浦山れたおれが、段々と
十貫目も背負にくい、方々に刈て置
てくれたのを、漸と焼付程持て戻
つた、祖母いかふかげんがちがふた
／＼、そりや其筈の事いの、橙の數
から見てまだ達者なテエ休んでの内
洗濯仕舞、連立てにませうと裾引
上てふみ懸れば、アこれお祖母、め

つたにまくり上んな、どごぞの仙人が見たらば、昔を思ひ出して通を失ふぞや、ホ、そりや五十年も前の事の、今は澁紙にけんぼ小紋置た様な太股、氣狂の仙人が目を廻して落ふはしらず、何所見せても氣遣な事ござらぬ、イヤそふもいはれぬてや獵師が悪い所を見たらば、猪かと思ふてねらをもしれぬ、何いはしやるやら機嫌じやの、ほんに其機嫌な時にいふ事が有、コレちさま、こなたが勘當した竹五郎方から、わしが所へ内證で切々の託言狀、腹も借す顔も合さぬ此親を、母様參ると書ておこす心ざし、今は氣もなをつた大きな出世、コレ祖母又いやるかいの、舞の正作にさへ養れぬおれが、出世したと聞て勘當赦しては、やしな

ふて貰たさといはれるが無念な、竹五郎を勘當したはそなたと添ぬ先の事十一や二で山へやれば、鬼狸を殺して殺生ひろぐ、田がへしにやれば牛を馬にして乗討の稽古、いふた事はいふた様にせねば置ぬ片意路者、それから思へば今の娘おとはが孝行血をわけた其方の指置、あかの他人のおれを、眞實の親と思ふて大切にしてくれる、取わけ舞の志、五つや六つの孫迄が祖父様くと廻す嬉しさ、おりや外に可愛者おじやらぬ、ソレ其様に、わしが連子のおとはが事いふて下さる程、こなたの子を勘當さして見てはゆられぬ、殊に舞の正作は牛博勞に行といふて、此春から内を出て今に戻らぬ、娘一人では力ないどふ有ても勘當の託言機嫌直

してやつて下され、ハテ扱くどい人じや、其様に竹五郎めが事ばつかりを苦にしておむやる故、肝心の舞の身の上が耳へ入ぬ、あの正作はの、ア、いやこれこなたが舞や娘の事を苦にしてじやによつて、大事の息子の出世が耳へいらぬ、あの竹五郎はの、まだいやるわいの、おりや世倅めが身の上は聞たらない、そういはしやらわしも又、舞の事聞いでも大にいふ事、そんなら互にいは猿開事ござらぬ、そんなら互にいは猿開猿、いつそ夫もまし、庚申待にゆるりと唯そ、猿が守する洗物、どりやゆすいでしまをかと川へおりしも谷川の、水の面へ流くる、花の一枝取上て、是はマア見事な花、ま一つこい祖父におまそ、ホニく来たぞく、ま一つこい孫にやると、拾ひ

取上コレ親父殿、見事な花が流
て来た、こりやマア何といふ花ぞ、
どれく、ホ之は花橋といふて、
大きな實のなるめでたい物、見やげ
にしたいおれにたま、ヲほしかしん
じよ、大かた孫へのみやげである、
イヤ孫へはよい物山で取て来た、け
ふは何もみやげがないと思ふたれば
鷹が追たかして、雀が一羽袖口から
飛込だ、懐へはいつた物は狩人も取
ぬといふに、おれは坊主にやらふと
思ひ翹く、つて持て戻つた、コレ
見やと出して見せれば是はく
よい物取てござつたの、何とわしに
其雀下されぬか、ハテ望ならば橋と
かへ事しよ、ソリヤ嬉しいと取かは
し、イヤ祖母、なんぼけんく、いや
つても、血筋は忝い物じやの、お

れがやる雀を、そなたがやらふで、
とりやつたの、イヤ、此雀を
孫にやるのじやござらぬ、そんなら
誰にやるぞ、ハテ竹に雀といへば、
竹五郎が羽を伸吉左右、持ていんで
摺て置た、糊くはして養ひます、エ
、そんなら、舌切ていなそで有た物
こなたは又其橋を孫へ土産で有ふ
がの、イヤおれも孫へじやおじやら
ぬ、そんなら誰に、ハテ簀の正作は
橋氏と聞た、五月の祝ひ月に橋が
手に入といふは、舞や嬢に花實の咲
瑞相、持ていんで女夫の者に悦はす
る、エ、それならおれも引むしつて
捨ふ物、ソレそれが悪い、こなたも
悪いと、互に實の子を捨て、なきぬ
中をば思ひあふ、曇ぬ心日の本の神
もあはれみ給ふべし、さのみはいか

どと折端も早く、アもふよござるは
おれが方から負て出て、連立ていに
ましよと盃かた付居る所へ、麥かつ
男二人連、道行咄に何と六兵衛日
外の天王寺合戦見たが、桶といふわ
るはきついわるで有たなアと、云つ
ゝ通るを祖父は呼留、ハテこなた衆
は面白い咄して行が其まあ天王寺合
戦といふは、どんな事で有たぞ此邊
からわづか二里餘りの所なれ共切は
つゝの劍の中髓に誰が見た者もござ
らぬ、直に見た咄が聞たいと、と
へば見自懐一人の男、おいらはの、
團子賣にいてよう見ました、六波羅
から隅田高橋とやらいふわろが、五
千餘りの兵を連て廊の渡る様に押寄
られた所に、彼桶殿は三百餘騎の
勢を隠し置て、やつとふが始ると、

あしこからはぬつと出し、爰からは
 によつと出し、出す程に切程に、こ
 りやたまらぬと六波羅勢、足を切れ
 腕切れ逃た所が渡邊の橋、かぼせい
 橋を押程にける程に桁おれてめき
 〳〵、五千餘騎がづでんどう、
 鎧武者が水にあふて瓢茄子の流れる
 様に、どんぶりこ〳〵、どんぶりこ
 逃て行術は、なかりけるぢさまさら
 ばと走行、咄の中より祖父はぞく
 〳〵、なんとおぼし聞てか、楠殿
 が六波羅勢に勝たといの、ア、きつ
 いわるじや、末代迄の大手柄、是程
 嬉しい事はないと悦びいさめば、コ
 レぢさま、楠がまけふが勝ふが、こ
 つちのかせにならぬ事、夫をそれ
 程嬉しいは、こなた楠といふわるに

深い縁でも有か、イヤまあさして縁
 が有でもないが、そなた楠をしらず
 か、インヤおりやしらぬ、そんなら
 おれもしらぬ、其又しらぬ人の勝た
 めつたむしやうに、ハテめんよふ
 な悦び様と、ふしぎ立られうち付所
 へ、刺下奴の肌に鎧、軍の併と見る
 よりやがて祖母は引留、申お奴様い
 つぞや有た天王寺の軍、楠とやら
 が勝たと申がほんの事やと問ば突の
 け、何馬鹿つくす、其勝たのはだま
 して勝た、其後又宇都宮の公綱様に
 負た、ヤア〳〵宇都宮公綱殿が楠に
 勝たか、ヲ、サ〳〵、其宇都殿は身
 が旦那つよい人〳〵隅田高橋が逃た
 後へ、わづか身共俱に五百騎の勢で
 懸向はれた所に、彼楠の古狸一戦
 にも及ず、午房程な尾をふつて逃た

〳〵、ハテナふそれは手柄な事や、
 そふして其後はどふじや、ハテ根問
 するわるだ、主人公綱は、楠を討も
 らしたを無念に思ひ、五百騎の勢を
 天王寺に留置、今軍評義の最中シテ
 〳〵其後は、ハテくどいわるだ、其
 後はもふない皆だ〳〵、溜つたら又
 咄にくべい、身共は用事有て國へ歸
 る、必ず逃ると思ふなと、いらざる
 念で落武者と看板打て通りける、ヤ
 レ嬉しや〳〵、宇都宮殿が勝たとい
 の、ぢさま聞てか、楠も叶はぬ〳〵
 日本一のお手柄とほた〳〵いへば祖
 父はむつとし、ヤイコリヤ祖母、よ
 つ程に悦んだがよい、有さまは宇都
 宮と縁が有か、近付か、イヤまあ、
 縁もなし近付でもごさらぬ、近付で
 もない物が何で夫程に嬉しいぞ、あ

徳太夫住家の段

中 豊竹呂太夫

鶴澤 叶

切 竹本津太夫

鶴澤 綱造

人形

祖母 小仙 吉田 榮三

祖父 徳太夫 吉田 玉次郎

宇都宮 公綱 吉田 玉藏

妻 照葉 桐竹 政龜

楠 正成 吉田 玉幸

女房 おとわ 吉田 文作

註 進 吉田 榮三郎

娘 みどり 吉田 文枝

悴 千太郎 桐竹 紋昇

ためんよふなわるでは有、こなたも
 最前楠が勝たと聞いて悦んだではな
 いか、ヲおれが悦んだのにはちつと
 譚が有、おれも嬉しかるには譚が有
 其譚聞ふ、マアこなたのから聞ふ、
 イヤいにぬ、おれもいはぬ、われが
 いはぬからは宇都宮が勝たのはうそ
 じや、イヤ楠が負たのが定じや、う
 そじや、定じや、イヤこいつが口が
 過るがな、コリヤさつきにやつた雀
 かへせ、おれもやつた楠戻しや、
 ノレ戻す、ヲ返すと、互にやつたを
 取戻す八十の三つ子とたとへにかは
 らず愚さは、楠取てコレ親父、鞆
 の氏じやと祝ふた其楠を、コレ此
 通りかなぐり捨てれば、われが竹に雀
 と祝ふた雀を、舌切雀殿にしてくれ
 ると、此角折て追はなし、あたらん

くさいいんでくれう、おれもいぬる
 勝手にせい、勝手にすると負ず、お
 とらず腹立紛れ日の暮紛れ祖父は盥
 をいたゞけば、祖母は柴を背に負、
 むしやくしや腹の取ちがへ我家へこ
 そは立かへる。

(床本) 徳太夫住家の段

軒のあやめに蓬艾草、端午の節句門
 口に建る、轆は龍龜の齡を我子へ鑑
 長刀、母は粽の粉を引ば、白より廻
 る稚子の千太は傍に眞菰ぐさ、むし
 る悪さも時につれ、よし蘆の葉の片
 助手助、ずると心では、ほめるも親
 の慾目かや、商賣は箱の長刀箱の鑑
 一荷にしやんと打かたげ、鑑や長刀
 葛蒲刀と賣歩行、轆を當て荷をおろ
 し、サア〜きたり〜、買たり

く、お子達の祝義物雲に羽をのす
 大鳥毛、赤熊に白髪之交つたは、分
 て目出たいおぼくの毛鐘、大身の鐘
 の長いのが、祝て親父の待道具、素
 鐘管鐘押込で、代物わづか十文字、
 安賣めせやめせくと、口早にこそ
 賣にける、近所の子供千太郎俱に立
 寄、あれこれと見廻す顔をじろく
 見て、アムこな子供衆は、ほしそな
 顔、エ、盗んで来たのなら只やりた
 いな、何を云てもたゞやつては、此
 方口が長刀きれ、鐘おとかいになる
 故、只と云てはマアならぬ、取分愛
 なお子、可愛らしい、利口そうな目
 もと、折たが有がやるうかと、口紅
 云へば千太郎、イヤくおりや人に
 只貰ふ事いや、ほしけりや買と一本
 さゝれ、テモ扱もきよふな息子殿、

親御が見たいよい育、と譽そやすの
 を母親が、閉嬪しさに白の手留、コ
 レ鐘長刀買ませう、休んでござれと
 思すも、子にほだされて見ずしらぬ
 人にも愛疎、こぼれける、是は忝い
 幸ひ雨もぼる付、濡してならぬ此代
 物、ちつとの間雨やどりと、内へ這
 入は、ヲ、安い事く、庭はせばふ
 て置れまい、ついそこな牛部屋へ其
 間に雨も晴ませふ、茶でも参れと小
 やさしき、詞にあまへ何とお家様、
 逆もの事に、五六本賣餘りを上ませ
 ふかへ、イヤノウ見やしやる通り、
 表に飾つて有共、祝ふて一本買ふか
 と云事、サア田草粉でも参れいのふ
 イヤ私はまだすき腹、茶が入たかつ
 い茶漬、それ迄おたばこ申請、煙管
 をかつて火をもらい、一腹致そとい

やが上、云も厚皮牛部屋へ、荷をか
 たげてぞ入にけり、ヲ、ア 人はお
 とましや、おぼの内へ来た様にと云
 間も隔、一間より娘々と徳太夫、腰
 も二重のやれ障子、押明て、そろ
 く立出、何と音羽、連合の正作か
 ら、便が有たか、替らずか、と問れ
 て何も知ぬふり、さればいなア、主
 はこの春から大利通ひ、牛博券に行
 れますれば、まそつと逗留でござり
 ませふ、ヲ、其牛博券も今は鎧の馬
 博券、楠正成と名のかはつた事も
 知て居る、エ、そりやマア前はど
 ふして、イカ隠しやんな、天しる地
 するといふ、是程にない事にさへ人
 の噂、まして大切に思ふ舞の身の上
 根掘葉掘開ずに置ふか、元あのわる
 は橋氏、親御の代には八尾の別當

と云者と國郡を争ふた程の家筋、正作が稚時果召れて、夫より乳母育こちへ貰ふてそなたと夫婦にしたもおれもまんざら山賊の筋でもない、先祖の事は、聳も聞て居られふ、軍に立ふが、合戦せふが、何で未練に留ふぞ、殊にわごれふは祖母の連子義理有おれに隠すのは、心が悪い聞へぬと、恨みかけられ音羽は氣毒、顔赤らめて居たりしが、此事お開遊ばしたら幾世のお案じ、お年寄の、苦になる事必云な咄すも折有んと夫の口留 隔て云ぬと思し召も、お道理、當春野飼の牛を枕にし、轉寢の枕元、雲の上人のお越有て、南へ繁りし木の元に休らふて居る男、天子のお頼みなり、と有難い勅鏡、今では楠多門兵衛正成、と申ます、ア

成程、當の孝行な心からは、苦にさすまいと思ふて隠せと云ふたも、尤、夫で何もかも、おれが聞た通り胸が晴た、去ながら心得ぬ事有ば祖母へは此咄し、必無用、シテ天王寺の軍に、宇都宮と云ふ者に、楠が負たと云ふ噂、何とそれは誠かと、聞れてうじくアイまあ其時は引れました、エ、扱こそ、口惜や甘若くば役に立ずとおれもナ、ソレ其様に苦に遊ばすに寄て、ア、何いやるぞいのふ、いとしいわごれふに添聲の身の上、苦にせいでよい物か、まだ開事も云ふ事も有ども、爰は端近、孫連一間へおぢや、粽も祝ふて巻ふし、軍に葛蒲は祝ひ草、敵の芦の葉をむしり珠數繫ぎにしてやると、ゑんぎを胸に米の粉を、引まつべ

く、親子の者を伴ふて一間へ、こそは入にける。
M 早夕陽も傾く頃表へ美々しき女乗物家來數多歩行者の者、先走りが門口より、誰頼まふ。詞徳太夫殿お宅は爰かと、尋ねに折よく祖母は立出で。詞成程爰々、どなた様やといふ聲聞いて乗物より出づる女中の華かき、五つばかりな娘連れ、家來を後にと追戻し。静々入るを祖母は不思議と打眺め。詞此住みわびたあばら家へ結構なお姿で、どれからお出でともてなせば、イヤ其様にうやうやしう御意遊ばす者でなし、定めてお前が徳太夫様の奥様でござりませう。ハ、御勿体ない、つい嬢とおつしやつて下さいませと、揉み手をすればこなたも手をつき、詞私事は照

葉と申しまして、徳太夫様のお子竹五郎が女房でござります、と聞いて手を拍ち。是は、サアサアこちらへマアこちらへ。何かと言はうぞ話そうぞ、文來の度に懇々入筆、逢ふたは初めて心は互に嫁姑、竹五郎殿も變らず無事でござるかの。詞成程息災で、常住お前のお文を見ては眞實の母様でも是程ではあるまいと押戴いて居られます。此度天王寺の合戦、敵を一戦に退げ、士卒も歸さず主も逗留、勝軍とは申しながら、心許なく是なる娘、みどりを引連れ竊かの見舞詞、次手なれども立寄つて、勘當のお託言、娘の顔も見せたら、父親様のお心も和がうし、又一つには、此度天王寺での高名、宇都宮公綱と武名を顯し、楠を追散ら

せしと申上げなば、よもや勘當お赦しないことはあるまいと勇みに勇んで参りしと、語れば祖母は四邊を見廻し。詞フン嫁女、親父殿に逢ふたりとも、宇都宮といふ名は云ふまいぞ楠に勝つたと云ふたら、並大低の事ぢやあるまい。其譯密に話して聞かさう。みどりを連れてマア奥へと心ありげな指圖には、否やと云はれず氣も濟まねど然らば左様に致さんと、娘を連れて奥の間へ、鹿ヲドリ早入相の鐘の音も、胸に響きて老の身の、思案とりくくなる所へ、祖父は一問を立て出で。詞なうお祖母、昨日川端でいさかふてから、おぬしも物言はず、俺も言はぬが、いから氣詰り、ちつと話す事もあり、何ともう仲を直そうかい。ヲ、おりや、疾

うからさう思うてをります。したがこなた何ぞ聞きやせぬか。イヤ何にも聞かぬ、がわでりよはさつきに何ぞ聞いたか。イヤおれも何にも聞かぬ。サさういやで話し悪い、いつそ二人が胸の中、一度に話そじやあるまいか。ヲ、こりや宜からう、まあ其話の發句はどうじやの。サア其發句といふは、アノ昔々去る所に、祖父と祖母と有つたといの。ホこりや珍しい話じやわいの。大方其祖父の息子に、勘當したのが有つたであらう。ヲ、有つた其作が出世して、宇都宮の公綱といふたげな。ムウそれこなた知つてゐるか、そんなら俺も話そ、其又祖母の娘の聲に、楠正成といふのが有つたといの。マアそれをそなたも知つてゐるか。知つて

ゐるく、サア其處が話のかんじん勘文、其勘當した伴と大切に思う娘の聲と、劍を振合ひ切つつはツツ、命を果さんとするげな、其親の身になつての心、悲しいとも情ないとも胸を刃で裂かるゝ思ひ、聲を思ふ父親も、息子をかばふ母親も、思ひは一つ斷末魔、俱に悲しからうと語れば祖母は泣き出し、なう其事思ふて幾せの案じ、義理と義理とに隔たれば、夫婦親子も敵味方、別れくにならうかと、そればつかりが悲しうござる。いはゞ互に意趣遺恨有つて軍するでもなし、丸ふするのが親の慈悲、思案して見て下されと、縫り歎けば。詞ヲ、夫は思はぬではないとや角思ひ廻した上、唯一つの了簡言ふて見やう、聞いてお見やれ。見

れば最前宇都宮が娘、みどりとやらを連れて来た、其みどりと聲の正成が子の千太郎とを、夫婦の縁を組置かば、子にほだされる親心、おのれと和睦の筋にもならうか是より外の思案は無いと、いふに涙の目を押し拭ひ。詞面白く、否やと云はれぬ和睦のさし様。ヲ、嬉しや。それで落付いた。スリヤ此思案がよからうか。よいともく上分別、善は急げちや今爰で、祝ふてちよつと、盃事詞ヲ、よからう、おりや千太を連れて來う、そなたはみどりを。ヲ、合點と、色も直りて氣も勇み、祖父は勝手へ行く跡に、祖母は一間の方へ行き、縁々と呼出せば、アイと答へて出て來るを、かたへに連れて小聲になり。詞おれが言ふ事よう聞きや

女といふ者は小さい時から云號、殿御持たねば人があなどる。祖母が宜い殿御持たせどと、云ひ含むる其内に、祖父は千太に着初の上下、吉野折敷に松と竹、徳利の口の引きき紙と。蝶花形の詞にて、いそぐ連れ出で座に直し。詞何と目出度いではないか、孫と孫とが一世一度の祝言祝うて立てた松と竹、鶴龜は職にあたる、尉と姥はそなたとおれ、道具が揃ふた祝ふて謠たを。ヲ、小聲でたつた一口。ヲツト心得、扇を開き舞七ツになる子がいたいけな事いふた殿が慇しうたふた詞ハ、ハ、ハ、是で祝儀は納まつた。サア盃を取上げさせ、さゝんとする後より、照葉は見付けて走り出で、土器取つて打割れば、おとはも馳出で我子を取つて

引退くる。お爺姥ハツト氣の毒の、胸撫で下すばかりなり。照葉は素より張つよく詞コレ申しお二人様、始終の様子に聞きましたが、よう思ふて御覽じませ。夫公綱は六波羅方、楠殿は天皇方、敵と敵との子供等を、祝言さしてはお上へ立たず、申しにくいが此照葉も、長崎四郎右衛門が娘逃げ足早い楠の子と、縁組んだと云はれては子孫までの名折れ。それとも親甲斐でなざる事ならとてもの事楠殿に降参させ、和睦あつた上の事。と聞くよりおとはは、なコレ照葉様とやら、降参とは何の事引くも駆けるも軍のならひ、天王寺の合戦に連合正成引いたるは五千餘騎の軍勢を、追散らした其跡へ、小勢で向ふ宇都宮、天晴の武士、一面

目與へてやるが武士の情と、わざと其場を引きました。逃足早いとは、エ舌長なとやり込むれば詞イヤ良い手な事おつしやんな。情で軍に負ける法があるか、聞かう、ヲ、言はうと、夫思ひの兩人が、臂張かくれば祖父は手をあげ、詞ヤレ其争ひ聞くに及ばぬ。スリヤどうあつても孫どもに、祝言さす事ならぬじやまでアイ其儀は御免と二人とも、言葉擦へば、もうよい。詞ナウ祖母早日も暮れた、看經しませう。佛壇へ御明上げておくりやれ。ヲ、無明を拂ふ大燈明、胸の曇を晴らさう、ござれと、手を引合てお爺姥ほ、一間へこそほ入りにけり。跡打ながめ嫁娘、わけておとはは氣にかより詞コレ千太郎、そなたは祖父様のお傍に

附添ひ、何ぞ變つた事あらば、聲を上げおれを呼びや、早う〜と追やれば、照葉も娘引寄せて、そなたも祖母様のお傍へ行つて随分御機嫌とりや、祝言の事御意あるとも必ず合點せまいぞ、ありや内證から手をまはし、頼んだお方が有つての事と、あてこすつて娘を奥へ、やる間も待たず。詞コレ照葉様、其の頼み手は誰が事。ム、外ならずお前の事、お連合の楠殿、負けに負けてお身の上が氣づかひさに、子供同士縁組ませ、それを固に此軍、引いて貰をといふ工み、ならぬ事〜、天王寺へひかへた軍勢は、心一致に身を固め楠討たぬ其中は、たとへ唐天笠が一つになつて攻めても動かぬ、逃げ様な侍と、金鐵武士は夫程に違ひ

やんすとほのめかす。聞くにおとは猶無念。詞とは言へ引いたは逃げたなり、なま中夫が武の情、今身の仇となつたかと、思へばくやしき口惜しさ、齒の根をくだき身をふるひ、恨み涙の折からに、一間の中の小庭より、ほつと燃立つ火焰はいかに蛇のまく如く相圖の烽火、ひらりひらく上ると其徳、秋篠、外山、生駒山、火の手を合す遠籥、數千本の旗幟し、鬨をどつとぞ上げにける。見るに恟り中にも照葉。詞是ぞ敵の隠し勢、味方の様子氣遣ひと、馳出だすをおとはは飛付き引捕へ。唐天笠が攻めかけても、びくともせぬとおつしやつた、お口に似合はぬ何で氣遣ひ、桶が妻とはが留めた。お邪魔いたすと張腰を、しつかと取

ればホ、、、、おしほらしや何遊ばす、野山に育つて田がへしの、牛網ひくとは當が違ふ、宇都宮が女房照葉ならば、留めてごらんせと、踏出す足は柳の枝、柳の腰に雪折れはござんすまいとひいて行く。詞どつこい〜お笑止や、殿御と合はしたお仲をば、瓢箪形に締め切るか、御運がよくば唐織の、二重廻りを引き切るか、二つに一つは定の物と、引き戻せばたち〜。合龍田の紅葉顔に散り、裾にちりつくばかりなりかゝる所へ公綱が、物見の者馬を飛して馳來たり。詞ヤア〜此家に宇都宮の御奥方はおはする、天王寺に控へし五百騎の軍勢、今見へし遠籥に恐れ、皆散り々に逃失せたり、主君の安否心許なし、急いでお歸り

〜と、言捨て又引返す。南無三寶と馳出すを、猶も押へてせり合ふ中間に刃合ふ劍の音、はつと立つたる血煙に、二人ははつと胸騒ぎ、争ひ捨て、走り寄り障子ぐわらりと引明くれば、朱に染みたる祖父祖母の今を限りの其有様、コハ何事を言あがり、かくなり給ふぞ淺ましやと、組り歎けば母親は詞恥しや嫁女娘からなるまいと思ふから、孫と孫との取結び、和睦の罫をかけ損ひ、死ぬるわいとの一音が、照葉が身には猶こたへ、左程に思召すなれば、連合にも言聞かせ、仕様もやうもあるべきに、お心早き御最後と、悔み涙に、祖父は起立ち。詞イヤ歎き遅い〜。そちが夫宇都宮は取分我の強き生れつき、此度の天王寺合戦、我

武勇で勝つたと思ふわ愚な事、天性敏き聲の正成、宇都宮は勘當の作、竹五部といふ事をよく知つて、一支部も支へず引き退き、高名さしてくれたは此親を、悦ばさんとの孝行と思ひも當たれば忝なや、詞おとはよう禮言ふてたも。さうとは知らで作めは、五百騎の軍勢を天王寺にとゞめ、楠を討たんとはかる。せめて返禮に追退げんと思ふから灰焼山籠の衆を頼み、豫ては聲の力にもと、拵へ置いたる遠籠、報せを見せたら刈置いた、柴薪に火をかけ、鬨の聲を上げてたべと、いひ合せたは爰ぞと思ひ、幸ひ祖母が洗濯の、布にしかける相圖の烽火、四方八方合す篝火蒸立てられては六波羅勢、皆散々に逃失せしたは、我智恵のやうなれども

日頃話に聞き置けば、矢張聲の智恵なるぞや。末世末代、楠が、計略と云はれん婿しき、詞是程の事にさへ聞怖する宇都宮正成を討たんと思ひもよらず、叶はぬ事と思へども、勘當したれば意見もならず、後先思はぬ猪武者、向ふ度に恥辱を取り、犬死しをるを見るやうで、不慙におぢやるとしやくり上げ、歎けば祖母も諸共に。詞隔てた私は義理有れば烽火を上げて公綱に、恥辱を與へる事ならぬと、せり合ふ劍の手が廻り死ぬる覺悟と言ひながら、悲しい事をしましたと、絶り歎けば何のいの詞おりやそなたの刃物で故意と、わしもこなたの劍を無理に見も前世の約束かと、泣惜るればおとはもせき上げ。武士といふ者は親子兄弟引分

かれ、軍をするも世のならひ、何故諦めて下さんせぬ。お前の方のある内は、公綱様へ我夫が、何の敵對致されましょ、お歎きは見せまいにと、悔めば苦しき手を合せ。こなた迄が忝い、ありようは其志を受けまい爲、詞二人の者は死にます。孝行深い、楠殿、宇都宮が向ふと聞かば、勝誇つた軍でも、引退くは定事さすれば、一天の君への不忠、其不忠は此祖父祖母が天照大神様へ敵するも同然、これ迄は婿殿に、いかいお邪魔になりましたと、斷り言ふて下されと、いふも涙、聞くも涙せめて末期に千太郎にもお逢ひなされて下されと、呼び立を祖母は引止め。詞いやもう孫には逢ひますまい馴染のないみどりできへ、孫と名が

つきや心が残る、まして千太郎は手しほにかけ、育て上げたほんそ子、顔見る程迷ひの種、やつぱり寝さして置いて下され、但し祖父様は逢ふ心か、あのお祖母のいやる事わいのたゞさへ目の先へちらついで、おりや言出すも胸が裂けるやうなおとは随分大事にかけて育てたもれ。アム此秋から寺へもやつて、いろは書いたら清書を佛壇へ供へてたも、それが手向の香花、死ぬる覺悟の其中でも朝ぶさも焼いて置き、菖蒲刀も買ふて置いた、目が覺めたらやつたも。おいら二人を尋ねたら、祖父は山へ柴刈に、祖母は川へ洗濯はと、いふて賺したもいの、わつと泣き出す心根を、思ひやりつゝ嫁娘、かつばと伏して泣き居たる。早臨終も

近附けば照葉は涙の手をつかへ夫の我慢高慢も、先祖の苗字を引起さんと心のはげみ、今お果て遊ばして、誰に勸當赦してもらはん、親御のお慈悲お情に、お赦しあつて給はれと涙に沈むをつく／＼見て、傍に有合ふ石臼を愛へとおとはに引寄せさせ我血を以て石の面を雲信士と書記し一つの石に妙三信女と書付けて。詞コレ是を見よ、總て此世にある人の戒名は皆逆修、ばゞもおれも、ながらへて居ると思ひ何時にても心を改め、天皇方へ味方せば、此時此石塔へ墨を入れよ、それが勸當赦した印も嫁女と、言ふが此世の暇乞互に祖父祖母手を取合ひ、思ひ合ふたる印

には、命も息も一時に、絶えてはかなくなりけり。二人は死骸に取付いて、前後にくれし折からに、牛部屋より荷をかたげ、そろ／＼出づる以前の商人。詞扱も疲れて、ぐつたりと一寝入やつてのけた。目覺しに何やらお笑止な事を聞きまして、アム思はず貰ひ泣きを致しました。ながらお悔みなされませと、悔を言ふて出る所に、一間の内より高聲に。詞宇都宮公綱待てと、呼ばはる聲は耳に胴突き、恟りして立留り。詞何じや。何の事ぢや、誰が事ぢやと行かんとなす。詞ヤア卑怯なり公綱、桶多門兵衛正成對面せんと云ふ聲を、聞くより商人荷を投捨て、上張取れば肌には着鎧、頭巾の下には鎖鉢巻荷籠に仕込みし弓矢たづさへ躍り出

で、詞ヤアしくも留めたり出かしたり、我眼前に親の最後、よそに見るも汝をば、見出さん爲にこたへし不孝、たゞ物ぐさきは此内と、思ふに違はぬ我眼力、名乗つて出でしは天晴れ健氣、見參の引出物、胴腹射抜いて得せんと弓弦をしめし待ちかけたなり。ホ、ヲ潔し面白しと、一間の障子をさつと開けば、床几にかゝつて楠正成、黒革絨の胴丸に、鉞形打つたる甲を着し、勢込んだる其形相、威有つて猛きにびくともせず、三人張に十三束、引かため、指詰め、引詰め射るこそあれ、鎧も甲もむら／＼と落ちて姿は眞菰草、薬人形とぞなりにけり。南無三寶たばかれしとあせるこなたに。詞ヤア／＼公綱、眼が見えぬかうるたへ者

楠正成是在り、定めつ矢種は盡きつらん、笑止々々と嘲り出づるを見るや否や。ヤア愚々、詞亦てもあらうかと、嗜み置いたる尖矢二筋受けて見よといふまゝに、切つて放せばあやまたず、鎧兜が一時に、落ちて同じく草の葉の、蓬つくねた人形に、二度憚りの無念の勢、おとはは可笑しくコレお二人様、詞今日祝儀の轡に添へ、いくつこしらへ有らうも知れず、よい鎊の兜やと、嘲弄せられ夫婦はじたんだ。死物狂とかけ行く向ふに、すつくと立つたる楠正成、公綱透さず弓とりのべて、はつしと打つ、引はづして、すつたと蹴落し、くわつとねめたるまなこの光、素より猛き宇都宮、たゞ一掴みと馳寄りしが、天性そなはる正成が

勇氣に思はず進みかね、五臟六腑をもみ上げて、睨み返へし、ねめ戻し龍に羽ある勢ひなせば、虎に角ある勇氣を顯し、互にほつとつく息は、鯨の汐吹く如くなり。二人の妻はあぶ／＼と、手に汗握るばかりにて、詮方もなく見えたる所に、正成賢美の聲を勵し、我天皇に頼まれ奉り、命を戰場に投打つ事、心有つて勇に語らず、今宵密に傳へんと、裏道より歸りし所、思はずも兩親の御最後急ぞお別れと思へども、汝此家に忍ぶ事を知つて、わざと控へし其心は互に劇しき戦見せなば、御臨終の妨げと、思ひはかつて延引せり、諺聞は天子に限らず、庶人に及ぶ。眼前兩親最後の場所、此場で直に勝負もなるまじ、時節も有らんと言せも立

てず、ヤア生ぬるこい一時を待たう
 か、女戻照葉を入込ませ、我は下賤
 に身を窶すも、汝が首を見ようばか
 り、其處を引くなと云ふこそあれ、
 仕込の槍を取るより早く、無二無三
 に突掛かるを、詞持つたる麿にて發
 矢と勿ね又突掛かるを身をかはし、
 程よく掴みし金剛力、此方は我慢の
 高慢力、持つたる腕とも引抜かんと
 もみ合ふ所へ怪しやな、死したる父
 の亡骸が、むつくと起きて槍の柄を
 中よりはつしと切折つて、佛倒しに
 どつさり、と、轉げしは如何に、こは
 如何にと、四人一同顔見合せ、不思
 議の思ひも魂魄の、此世を去らぬ子
 故の闇。思ひ續けて人々はわつとば
 かり泣しむ二人の妻は涙と共に夫
 々に取纏り。四十九日が其間は、

魂其家をはなれずと、聞きしに違
 はぬ今の有様。お痛はしきは父御の
 お心、思ひ是つてせめてまあ、五十
 日の忌明くまで勝負を待つて下さ
 せと、敷くも道理ことはりと、流石
 に猛き公綱も、素より仁義の桶も
 眠合ひたる目は涙、互に待つとも待
 たぬとも、云はで別に猛將勇將。
 妻は子供を呼出して、死骸に逢はす
 もかたはの聲の、便り少し眞菰草、
 葛蒲勝負は時の運、棕に軍の血祭と
 思へば悲しき槍長刀、立てし幟は大
 旗小旗、冥土へ靡く白旗も、此世の
 名残と、合正成が父の死骸をかき抱
 けば、公綱も母親の、死骸をかへ
 てこれまでの、義理の情の一禮に、
 兩將並んで亡骸を、押戴きし志、二
 人の妻は回向の經文、唱ふる聲が鬨
 の聲、互に戰場々々と言葉を残し別
 れ行く。

關西新派劇 演 歸

五月一日初日

初日に限り

午前十一時開演

毎日正午

五時半二回開演

第一 朱 と 緑 三幕 九幕

大阪朝日新聞所載 藤井肥水長藝撰

大寺甲吉原作 高屋貞澄演出

第二 母なれば 二幕 四幕

大塚克三藝撰

第三 鬼 瓦 二幕 六幕

藤井肥水長藝撰

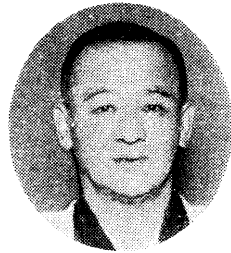
雜誌(宮主)所載 子母澤 寛原作

北斗彰三脚色 星 四郎演出

角座

どうとんぼり

角座



乍憚口上

新緑の候彌々御機嫌麗はしく祝 着の至りに奉 存 候

緒てこの度當座に於て二十年來出勤罷在候竹本土佐太夫、同
合三味線野澤吉兵衛儀、功成り名遂げその晩年を全うせんが爲
め、引退を決心致し候に就ては、當座と致しても同氏多年の勞
に酬ゆるため花々しく引退披露興行 仕度、紋下竹本津太夫、
豊竹古靱太夫三味線鶴澤友次郎、豊澤新左衛門人形吉田榮三、
吉田文五郎以下當座全員懸命の努力を以て土佐太夫最後の舞臺
に錦を飾らせ度所存に有之何卒意義ある當興行御諒察下され初
日より賑々しく御來場の程偏に希上げ奉り候

昭和十二年五月

文 樂 座

敬白



六角堂の段

竹本 鑑太夫
豊澤 新左衛門

人形

女房	おきぬ	吉田文五郎
弟	儀兵衛	吉田榮三
丁稚	長吉	吉田玉次郎

桂川連理柵

六角堂の段
帯屋の段
道行桂川の段

このお半長右衛門の事件は「曾根崎模様」宮蘭節の「臙の桂川」歌舞伎の「桂川 仇 白波」に仕組まれ好評を博したのを安永五年十月北堀江座に菅専助が書下し上演したもので上下二巻になつてをり、「道行戀の乗かけ」、「石部の宿」信濃屋」が上の巻にこんど上演さるゝ「六角堂」帯屋」が下の巻になつてゐます。その内容にいたつては種々區々の巷説が傳へられて來てゐますが淨瑠璃の方では結局「戀は思案の餘」を取つてゐます。帯屋の長右衛門は遠州から

の歸りがけ石部の宿で伊勢詣りから歸る信濃屋の娘お半、丁稚の長吉、乳母等と同宿しました。その夜長吉が無慮の戀慕からお半は長右衛門の部屋へ遁れはしくもそこで十三のお半と四十五分盛りの長右衛門との奇しき契りが結ばれます。長右衛門の女房お絹は人一倍の貞女で夫とお半との仲を知り乍ら家内に浪風の立つ瀬戸には何時も夫を庇ひます、義理ある家の中の浪風に心を痛めてゐる上にお半の腹帯、それにすりかへられた政宗の詮議、等所詮生きて甲斐なき命とお半を連れて桂川へ身を投げるといふ筋になつてゐます。

(床本) 六角堂の段

名に高き爰も都に隠れなき六角堂と

いふ靈地有り、我思ふ心の内は六つ
 の角只丸かれと夫婦中、祈る願ひか
 くるくると御堂を廻り、帯屋のお絹
 供さへつれぬお百度参り、まはり仕
 廻の圖をかながへ後を慕ふて小舅儀
 兵衛、ア、コレくお絹様ちよつと
 くと小影へ招き、奇特に毎月お百
 度はいかなる願ひでましますぞへ、
 ハテ女子の願ひはいつ迄も夫婦仲よ
 ふ第一に舅御様御夫婦の、どふぞお
 氣に違はぬ様にと観音さまへかける
 御苦勞、したり貞女かなく其心に
 惚た我ら明くれくどけどむごい返事
 夫婦中よふ祈つても兄貴は魂が返つ
 て有る、マ美しいいなさんを置て
 河東へ這入込、自前の藝子にマひと
 い乗り、夫でたらいで隣りのお半に
 ひゞきを入れたを知らずかへ、ア、

儀兵衛様やくたいもない折々の東通
 ひは殿御の有内、間柄といひ年も行
 かぬお半様そんな事が何のある、そ
 りや皆世間のいひなし、てんごうに
 も言ふて下さんすな、テモマ愚解人
 では有るはいの、みだらな證據はコ
 レ此狀じやてな、長さん参るお半よ
 り、此片かはもどきな狀が有てもま
 だそふでないかいの、ム、成程ソリ
 ヤマア合點の行ぬ文一寸貸て下さん
 せ、ヲツトどつこい久しいものじや
 がサアそれから御らふじ、ハ、ハ、ハ、
 ちと此方に入用な證據の狀、それ共
 にわしが言事うんといふ心ならハテ
 やるまいものでもない、サアどふす
 る氣ぢやと寄添へば、うるさふと思
 へど男の爲荒立てはと上手者も、主
 ある私をよもやと思へど、眞實なら

ばおりを見て、エ、忝いそんなら
 手附にお口を祝ふ、ア、コレ人が見
 る先へくと突飛され、てななく
 後から早ふも尻くらひ、観音堂
 を別れ行。後につくくりつと置つ
 思案に逝はも忘るゝお絹、寺内へ不
 儀着籠ぎけてふらくく丁稚の長吉
 ヤお絹さんじやないかないな爰に何し
 てござりませ、ヲ、長吉殿か、わし
 や観音様へ参つたがちとこなたに咄
 したい事が有る、ヲ、よい所で逢ま
 したサマアく爰へく、ハテマア
 爰へおじやいのふ、さよならお絹さ
 ん御免なして下されや、シテ咄しと
 いふはな、アノ咄しといふは外でも
 ないがの、そちのお半様と長右衛門
 殿との、ハイ知てゐる段かいなく
 イヤモウとえらふ知て居るはいな、

アアノ石部の宿屋で泊つた時に
エツトツトもけたいな事を見てな、
やつぱり今にむねはくらゝゝゝ、
ヲホ、ゝ、ヲ、そうである道理ゝゝ
惚てゐやるお半様を寝取られたら腹
が立筈、ア、いへゝゝゝお家様
ゝゝ何のわしがお半様に、ア、イヤ
コレ隠しやんな知て居るがわしが言
よふにさへしやるなら、そなたの戀
は叶へてやるが何と談合に乗氣はな
いか、エ、そんならアノ何かへアノ
お前様の言やうにすりやお半様とわ
たしが戀は、ヲ、叶へてやるゝゝは
いのふ、エ、そりやほんまでござり
ますかへ、ヤそんなら言ふかないな、
何じやいなアノナお絹様お前様の手
前もマチつくりちつと恥かしいがな
アノナ有様はお半様にほホ、ゝ、ア

イ首切惚て居ますはいのふ、女夫に
して下さんすならどんな事でも、ヲ
、其心なら近い中こちの内で此事を
打割て山あげる、サ其時そなたがそ
こへ出てお半はおれが女房じや、伊
勢參りから念ごろして居るとつゝば
つて言やるとの、こちの長右衛門が
モどのやうにあらそふてもあの人の
手へは、アイわしが入ぬ、ハテ主で
あらふが家來で有ふが戀に上下の隔
てはない、一度でも抱れて寝たと言
ければそなたの戀も叶ふといふもの
まよふ合點がいたかや、ハイム、成
程そふじやな誰がどふ言てもおれが
念ごろしているといひはる事は合點
じやが、そふしたら大方こちの後家
様がわしを迫出すで有ふぞ、ハテそ
こらを案じて色事が出来るものかい

の、もし迫出さるゝに極つたらお半
はおれの女房じやと大きな顔して連
て出や、ア、いへゝゝ申しお家様
ゝゝ連ては出られませぬわいな、そ
りや又どふして、サイナ連て出ても
行所がござりませぬ、サアそこはわ
しが吞込で二人ゆるりと暮すほど金
はわしがつゞけてやる、エ、そんな
らアノ金を借ておくれなされますか
へ、是はマアゝゝ何から何まで大き
に御世話でござります、何のゆかり
もない人に海山御恩の其上に、又色
々の御苦勞かけお金出して私が戀叶
へて賜はるお慈悲心、思へばゝゝエ
、コレマ勿体ない、ヲ、長吉殿何の
いのふ、これはマア當分の小遣ひと
巾着より取出す金、小杉に包んで手
に渡せば、エ、こりや何じやいなヨ

帶屋の段

切竹本土佐太夫

野澤吉兵衛

人形

娘	お半	桐竹紋十郎
丁稚	長吉	吉田玉次郎
兄長	右衛門	桐竹政龜
女房	おきぬ	吉田文五郎
弟	儀兵衛	吉田榮三
親	半才	桐竹門造
母	おとせ	吉田玉七

ヲ、コリヤ金じや、ヲお金じやん、ハ、ハ、エ時にとエ、一朱、二朱三朱四朱、ハア、こりや十二朱有はいハ、ハ、是をきつさりはづむとはア、氣の幅びるなお絹様、エ、有がたい、有がた山のほとゝぎす、とけつかのはい、ハ、ハ、イヤモ夫に違ひのない事ならお前の下知は背きませぬ、ヲ、よし、そしたら連立て逝ませふ、しかしコレ長吉の色事しめ、アイタ、お絹様なんだすな、おだてゝおくんはんなハ、ハ、ハ、サ、行ませふ、おつとお供を普願寺、三條通りを直すぐに柳の馬場を上り行く。

(床本) 帶屋の段

柳の馬場を押し路軒を並らべし吳服

見世、現銀商ひかけ硯虎石町の西側に主人は帶屋長右衛門、井筒に帶の暖簾を掛値如才も内儀のお絹、氣の取りぐるしい姑に日をもらさじと障がけ、洗濯物を引のしの、皺は寄つても五調作り、母のおとせは勝手を出で詞朝飯の釜下に置くとかけ出した長右衛門、もう晝過たに戻らぬは又川東で吞すえて居るのである、お絹ちつと云はしやれぬかいの。イエ、遠州の殿様から講取の脇差、研屋からくると其のまゝ藏屋敷へ持つて參られました。サイノ、脇差の研が出來ましたと持つて行くばかりにから暇が要つて内の見廻しが出来るものかいの、ア、同じ事でも弟の儀兵衛めは、モ痒い所へ手のゆくやうに精出し居るに、エ兄のぬるまに困

つたと、繼子を憎み實の子を持嘩したる最負口、聞きかねて隠居繁齋、珠數爪ぐつて奥より出て詞ア、おはへ聞辛い、死なれた隣の治兵衛殿が五つになる迄育てられた長右衛門無理に貰ふて家の根づき、死んだ先の女房は隣へ義理があると、あらい詞もつかはなんだに、長右衛門成人以後後妻に直つた身を持つて、連子の儀兵衛ばかりを大事にかけ、兄が事と云ふとがみく、エ、ちとたしなみやれ、ヤコレ嫁女、氣にかけてたもんなと女房にかはる佛性、詞オ、その結構を見込での財産をさへほうさにする長右衛門、随分と可愛がらしやれ、ア、やかましやのく、コレお絹隠居へ連れて居て、晝寝などさしてたもれと負けて居ぬ口逆らふは

後生の邪魔と繁齋は、裏の隠居へ嫁引き連れ、行くと戻ると一時に儀兵衛はとつかは内に入り、母者人聞かしやれ、一昨日兄貴が取りに行かれた駿河の爲替、未金を見ぬ故合點がゆかぬと飛脚屋へいて聞ふたれば一昨日長右衛門殿に渡したと爲替手形を出して見せた、すりや爲替の百兩は、兄貴が宙で盗ねたに極つた、オ、左様であらう共左様であらう共、戻りおつたら吟味して親父殿への面當、ぐつといがめてよい楽しみ、イヤコレ儀兵衛今一つよい事はノウ昨日登つた濱松の五十兩も金戸棚の合鍵して、コレ見やちよろり盗んで置いたは、金の入るわが身にやりたさ爲替の金をくすねたからは、これも兄めに塗付ける、出来た〜母者人

コレ此の五十兩はのコレカラ〜と囁く弟、兄長右衛門は棒鞘の一腰こしにさしつまる難儀をなんと投首し、しほ〜歸る我家の内、見るより母はやんぐわん聲五丁か十丁ある屋敷に半日の上かゝつて内の事は何になる、朝からげい子やお山狂ひもあんまりてうてござらうと、わめくは隠居の耳へつゝ抜け、又鬼婆がしやら聲は長右衛門が戻つたかと、お絹をつれて親繁齋さつきにも云ふて聞かすに長右衛門さへ見りやかみ付く様に、近所の手前とちと思やれ長右衛門もひだるかる、ソレお絹早う飯をおましや。イヤ飯所ぢやないぞ、問はにやならぬ事がある。コリヤ長右衛門一昨日取りにいつた爲替の百兩、ドレ金見やう爰へ出せと云

はれて吐胸の長右衛門、イヤ折角参つたけど先の亭主が折悪しく留守、金は明日受取る約束。ア、コレ〜

〜兄貴、エ、ぬけ〜ぬけ〜、嘘を云はつしやるな、己やたつた今先へいつたれば金はこなたに渡したと、爲替手形を出して見たがそれでもこなた受取らぬか。エサアそれはアノ金は明日の約束で先へ手形はやるまいが。兄貴、エヤ先へ手形はやるまいがの、ア、コレイノコレ儀兵衛〜詮議にや及ばぬモウ川東へ飛んぢやろ、昨日登つた五十兩も心元無い、サア爰へ出して見せ、あつと云ふより長右衛門巾着の鍵こて〜と金戸拂の引出し明け詞ヤア五十兩の爲替の金がない、どうした事と驚く夫、お絹も惱り繁齋も俱に

驚く泉れ顔詞オ、盗人たけ〜しい鍵持つた者が出さいで誰が取るぞいやい、ハア之もお盗み遊ばしたのぢやな。オ、適な家の根繼ぢや〜

〜ノウ、根繼ぢや〜親父殿の安堵であらう、嫁御囃嬉しかるノウ、イヤコレ母者そればかりぢやないまだ〜まだ〜と滅相な事があるわいの、コレ隣の娘お半〜兄貴が念頃して居ると近所から云ひ立つれど、アノいとしなげに兄貴に限つて猥らな事、よもやあるまいと思ふたが、コレ〜〜違ひない、コレ〜この状でエ何ぢや書きおつたな、爰らあたりから讀みかけやうか、エ何ぢやエ、ヘエ口の間はとつて退けてと、伊勢参りの下向道石部の宿

の假枕、今しも忘れかね候。どうぞどうぞ今一度、ヤア、嬉しき御見を願ひ上げ候。長さまゝいるお半より

ハア、ませたり〜小へげたれめがヤア〜そりや大それた不義いたづら兄弟同然と云ひ、恩ある家の小娘をそゝなかし、嫁入の邪魔をおのれマアようしたな、コレ親父様、なんとがみ〜云ふが無理か、水晶輪の様な儀兵衛、最負口でござるかやと悪と悪でも當座の理詰。長右衛門は身に冷汗、親繁齋も胸迫り、長右衛門、エ、情けない事してくれたな色は心の外とは云へば、モ餘り圖のない取合せでおりや世間〜顔が出されぬ、嫁女の里へもどの顔さげ、どう挨拶の爲様があらう。指さゝれぬ帯屋の家、暖簾に泥を能くぬつたと

始めて聞いた親の恨み胸に釘つ長右衛門、ア、面白涙にくれ居たる。お絹は舅の傍により詞一圖にお聞きなされてはお腹の立つは尤なれど長右衛門様に不義はない、ありや相手が違ひました。ア、コレははお絹女郎去りとはくく今讀んだをどう聞かしやつたのぢやぞいのう、其上にコレくく長様參る、貧乏揃ぎもならわいの。サイナ其長様がきつい間違ひ、お半様の色の相手は内の子飼の長吉ぢやわいな、エ長吉ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、コリヤ臍が石橋舞らわい。ハ、ハ、ハ、ハ、まだくく鏡合ふより長吉々々長よく内に居るかい。一寸来てくれ、ちよつと、ちよつとに門口から、どやけば隣の内より長吉疾しや遅しと走りくる、義

兵衛は落付く布袋形詞コリヤ長吉。我とそちのお半女郎と、念頃して居るとい、いやい、覺えないと、ソレさつぱりと云ふてしまへ、コレくコレ長吉殿、愛ぢやくノ合點か、サア覺のある事云ふたがよいと、お絹が目ませ存込む長吉、詞エ、何んぢやア何んぢや、皆様の手前もエ、ちつくり面目ないが、エ、アノ何ぢや、アノアノ伊勢參りの戻りナア石部の宿屋でもつくりと面目ないが、お半様と女夫事、アイ、念頃して居りますからは、お半様はわしが女房。ヤイくくそりや何ぬかすぞい、コリヤくく此狀ナ。サア此狀に、長様參るお半より、エ、義兵衛さん七くとい、長様參るはおはもじながら此長吉、エ、何の事ぢやぞい

テモげに氣のない奴と義兵衛は天窓かきむしる詞し母様現在の戀の本人が出たからは夫に不義はござりませぬぞへ。ハテそりやもうしよ事がないは、が爲替の百兩と五十兩はどしたぞ、サア長右衛門白狀せい、申し母者人、如何にも百兩の金は私が悪づかひ、なれ共五十兩の金はぞんじませぬ、こりやどこぞに合鍵した盗人めが。あるなら出せ。其盗人はサア誰ぢや、鍵を持つてつけかいて居て盗人は外にある、ム、盗人が外にあるとはア、何か、コリヤアノ白川様から釣取る様な義兵衛や如來様見る様な此母に、ぬりつけふと思ふのか、乞食の子やら盗人の子やら知らぬ捨子のおのれとは違ふ、素性正しいこちら親子に科を着せやうと

する横道者めが、サア〜五十兩の
 行先を云へ、云はぬとかうぢやと棕
 欄箒振上げてりう〜肩腰分け
 ず打ちすえる。こりやあんまりとか
 け寄るお絹、箒をしこかと動かせず
 詞エ、エ、お前はなア何とした
 何としたとはエ、朋慾ぢやわいな
 へ、いかに、胤腹分けぬとて、さ
 う酷たらしうはせぬものぢやわいな
 云はぬが禮儀孝行なれどお前方の氏
 素姓もあんまりあやは脱げぬぞへ。
 サア云ひませうか云はうかと、腹立
 つまゝの捨詞眞面目になつた母息子
 長右衛門は女房を引退け詞コリヤ母
 に向ふて慮外な悪口。それでもお前
 云ひ止まぬか、サア〜何に云
 はしやんす禮儀も人によるわいな、
 なんぼ結構におしらうてもかみ分け

のあるかゝ様ぢやない、エ、私や腹
 が立つ〜と身をふるはしたる
 無念泣き、心根不愍と引寄せて道理
 ぢや〜、がコリヤ親ぢやわいやい
 親と云ふ字で何事も虫を死なす
 胸の中、思ひやつてくれ女房と、拳
 を握り男泣き詞オ、それ〜親ぢや
 ぞ〜、親に向ふて何の不足、コリ
 ヤ儀兵衛ちつとかはつて箒の役叩き
 のめして金の行術を、オ、合點と棕
 欄箒振上る手をぐつと捻上げ詞ヤ我
 にはよう叩かれまい、美事な兄をわ
 りや打つか、イ、ヤ弟が打つぢや
 ないぞ、おれが名代にとつかして
 へ、金の白狀も絲瓜もいらぬぞ、
 兄に指でもさしたらば、此繁齋がう
 めをばいまくるぞ、コレ親父殿、金
 を盗んだ長右衛門、何でこなた最負

する、ソレよれが大たわけの親玉と
 やらぢやわいな、長右衛門は此の家の
 主人、百五十兩が千兩でも我物を我
 が使ふが、又撒きちらそうが心次第
 それを盗んだと詮議立て阿呆臭いわ
 い、づけ〜物を吐かしたら、昔の
 飯焚きお竹にをひさげ、長右衛門女
 夫が草履直さし詞親子共にぶちのめ
 させて責つかはすぞと、道を立てた
 る父親の、情に女夫は有難涙、親子
 はふくれる焼餅顔詞ア、儀兵衛草臥
 たノウ、台所で一ばいせうかい、オ
 、それがよござんしよ、コリヤ長吉
 め、失せい、おのれにや大分臺詞が
 あると、弱身を見せぬ親と子が、後
 に引添ひ出来合の、つばをかぶつた
 色事師、打連れ勝手へ入る跡を、早
 くれかゝれば下男、燈す八方行燈の

灯、佛壇の御燈は年寄役と繁齋が、
こて／＼燈せどしめり居る女夫の者
を膝近く、詞一年一年尻が温もり、
道も義理もしらぬばゝめ、追ひまく
るもも合點なれど七十に近い繁齋
女房の離別が見目でもない、モ堪
忍の胸をさすつて居る、したが否と
云はうが應と云はうが、近い内隠居
へ呼取り、母屋の事は構はずまい、
女夫乍らそれを樂しみに煩はぬ様に
してたも、又長右衛門も何やかや、
氣の採める事もあらうが、浮世に長
うも居ぬおれに、逆様事など見せて
たもんな、物の譬へはあれアノ御燈
僅な燈心も一筋でも、油との持合で
燈つてある、油は繁齋燈心は長右衛
門、暗いと云つてはかき立て、段々
とかき立て、もがきあせつて燈

心が無うなれば、油はあつても家は
暗闇、ア其の氣の細い燈心一本、コ
レ高が町人の身の上で、これが恥の
立つたたぬとは畢竟心が狭いと云ふ
もの、ちつと堪へて氣をかき立てさ
へせねば、いつ迄も遠洲の御用も相
變らずと聞く様に、親に安堵を頼む
ぞやと、くゝめる様に箸折り鏡、心
は親身かゞむ腰、伸して佛間に入
けり、親の慈悲心身にこたへ、差俯
向いたる夫の傍、云はんとすれど胸
ふさがり、しばし、詞も出ざりしが
コレ長右衛門様、道理は道理なれど
お前はきつうすまぬ顔ぢやが、必ず
ひよんな思案やなど怪我にも出して
下さんなエ、姑御や小舅につらい
氣兼ね辛棒も、お前と云ふ人あれば
こそ、十年連添ふ女房の手前、立た

ぬ事も何にもいらぬ、おやま狂も藝
者遊びも、そりや殿様の器量と云ふ
もの、お半女郎と二人が仲、ひよつ
と私が知つたかと、言譯はさしやん
す媒酌詞々愚鈍な者でも女房ぢやと思
よての心づかひと、私や心で拜んで
ばかり居りました、其の返報ではな
けれども縁組變改は年ほも行かぬ
あの子でももしやお前の樂しみにな
りもせうかと心の奉公、詞は疾う
から知つては居れど、愠氣所か顔へ
も出さぬは、氣の毒がらすが笑止な
と、結構な舅御と、意地悪い姑御の
耳へ入るかとそれが悲しさ、私も女
のはしぢやもの、大事な男を人の花
腹も立つし、愠氣の仕様も満更知ら
ぬでなければ共、可愛い殿御に氣をも
まし煩ひでも出やうかと、案じ過し
て何にも云はず、角堂へお百度も

どうぞ夫にあかれぬ様お半女郎の二人の名が、立たぬ様にと願立ても、はかない女の心根を不慮と思ふていつまでも、見捨す添ふて下さんせと夫の隣に打ち伏して、くどき立てるぞいぢらしき、長右衛門も目をすり亦め、女房共忝ない、云やる事が道理だらけ道理のないおれが身一つさりながら百兩の金を色遣ひと云ふたは嘘、そなたの弟才次郎が死ぬるを助けた雪野が身の代、エ、それはまあ、サ、サ、サア堅ふ此事云ふまいと思ふたれど、浮氣らしい色狂ひと思はれない爲の言譚、わが身の弟の事なれば、惜しくは思はぬ爲替の百兩、又五十兩の盗人はしつかりと知つてあれど、サア詮議をすれば不幸になる、此二た口の譚は立て

ど面目ないはお半が事、遠洲よりの戻りがけ、お半は長吉乳母諸共、伊勢参りの下向道石部の宿で泊り合せ秋は口の座敷に寝て居る、お半が來て起したも夢現に聞いて居れば長吉が参りがけより無体の戀路、明日はいぬれば今夜はこゝにと泣沈む、私を知つては長吉が氣の毒に思ふであろし、殊に又子餉の奉公人、内へいんでも必ず母御へ告げてやりやんなサア夜明も近いし乳母が傍へと、エ、モウらちも無い事、我身ながらも愛想がつき、連添ふそなたに顔上て云ふも云はれぬ身のあやまり、美くしし云ふてたも程おりやエ面がかぶりた、併しこれもさつぱり埒明けてしまふたれば、どこへなりとも嫁入

するであらうぞいの、親父様の有難い意見と云ひハテ過つて憚らぬおれが身の上、何にも案じる事はない兎角これまでの事は、コレあやまつた、エ、わつけない、女房に何の託、もう、此事はさらりと流して又云出さぬかための盃わしや肴拵へよう、一つ上つてちとお休み、詞そんならそうせう、ア、氣くたびれかふら、ねむたい、其間も一睡ヤツころりとこける、夫にあてがふ枕薄團打着せ女房は、勝手へつかは行くかげを、薄團の中より手を合せ、詞不所存な長右衛門を男と思ふて辛抱する心、いまの嬉しき過分さ、千萬年も連添ふて禮が云ひたい、たんのうさせたい、取分けて五つからお世話なされ、親父様末

期の水も上ませず、逆様事の歎きをかけるは不孝と云はふか道知らず、さつきの御意見お絹が心底、聞けば骨身をさかるゝ苦しみ、親父様の御了簡お絹の心はさばけてもさばけぬものはお半の事、死なしやつた治兵衛殿お石殿へ恩を仇、其上屋敷へ持つていた正宗の差添はマアいつすりかへられたも知らぬ贖物、最負強いお留守居も、お國へとりなす詞がない、今夜四つ迄御詮議仕出せいと、モ了簡は付いたかと、どこを詮議も雲を開、所詮生きては言諺も立たずモ死なうと覺悟極めたれ共詞親父様やお絹が顔、名残に一目と見に戻りいよゝ女房に苦に苦をかけ、不幸に不幸の覆輪かける、此身は何たる大悪人、モ、愛想もこそもつき

果てた我身の上と忍び泣き、枕も漂ふ涙なり、同じ思ひを信濃屋のお半は胸の憂さ辛さ、よそ目を包む振袖の、内を覗いてよい首尾と、そつと這入て枕元、長右衛門様、長右衛門様、今朝下さんした文の返事、ちと逢ひにさんじたとゆすり起せばとほけ顔詞フウオ、お半か、返事に來たとは合點がいたか、成程お前のお仰有る通り得心してこれ切にとんと思ひ切りませう、オ、出かしやつた

せと抱起して顔つく、見る目もあかれぬ雨やきめ、長右衛門も此世の別れと、口へ出さねど心の内詞コレ何もなき、思はずとらう、コレ煩はぬ様に、母御へ孝行、アイ、今迄はよう可愛がつてくださった、禮は云はずに氣を採まして、ア、やつたいもない子ぢや、死別れサア死別れではなし縁は切つても朝夕見る顔、ア、コレ、誰も見ぬ内サア去にや、コレ去にやいのと突きやられ、名残も惜しの離れ得ぬ、衾をわけて出て行く、果は桂の川水に、浮名を流すぞはかなけれ、虫が知らずか長右衛門詞ア、どうやらおかし、今の去にやう、合點がゆかぬと門の口、落ちた一通灯かげにすかし、詞書置の事、扱こそか

け出して、皆闇に、かげさへ見えぬ
 四つ辻を、又かけ戻つて見る書置、
 佛壇の間に繁齋が、看經の聲いつも
 よりも無常を誘ふ鐘の音、南無阿彌
 陀佛、南無阿彌陀佛なむあみ、エ
 、讀み詞おまへと縁切り外々へ嫁入
 りする心もなく、殊に只ならぬ此身
 世間へ知れては私が恥は厭はねども
 お前の名を出すが悲しく、お細様へ
 の詭言や、かゝ様に叱られぬ中、桂
 川へ身を投げ候、エ、お前は御無事
 で御夫婦仲好う折々には一遍の御回
 向願ひ……、エ、ア、可愛や、突詰
 めた娘氣で苔の花をちらさすも、皆
 此長右衛門がなした業ぢやわいの、
 南無あみだ、讀み詞嘸ぞやか、
 様の敷き方落と存候間、江戸の
 兄様呼び戻し朝夕の御介抱頼み上げ

候、コレ、そなたが死んで
 猶もうて生て居られぬ長右衛門、一
 所に死ぬが親御一言譯、ア、如何様
 因果、車の輪、十五年以前、宮川町
 の藝子岸野に登り、つまらぬ事で桂
 川へ心中に出た所、先へ岸野が身を
 投げたを、見るよりふつと死に遅れ
 人の知ぬを幸ひに、其場を遅れ今
 日迄は生延びしが、思へば最後の一
 念にて、岸野はお半と生れかはり、
 場所もかはらぬ桂川へ、我を伴ふ死
 出の道連れ、ホウ、これこそ因果の
 罪亡し、さうじゃ、観念し桂川
 へとかけ出す、道引違へ本間五六、
 門口覗き相圖の手拍子、長吉勝手を
 忍び出で、詞々兄弟者大事ない爰へと懐
 より取出す五十兩、義兵衛から請取
 つた約束の骨折賃、件の脇差持つて

きてか、オ、さげて来たに金に引か
 へヤナニコリヤ長吉、おりや何にも
 讀を知らぬが、此脇差はどうした代
 物の骨折にさへ五十兩、儀兵衛殿は
 よう出すの、ハテ其五十兩も根は相
 鍵した盗み物、此脇差は長右衛門が
 遠洲の殿様から請取つて来た、誑物
 戀の敵の意趣晴し、石部の宿で掬り
 かへたはおれが細工、何とよいか、
 よい共、それを儀兵衛はどうす
 るつもり、サアイノウ長右衛門のう
 つそりが塵物と知らず研にかけ、今
 日藏屋敷へ持つていてのう、えらう
 白玉を貰ふて戻り、今夜四つ迄に正
 眞を渡さねば、どんなぼくが来うも
 知れぬ、所で此正眞を、儀兵衛が外
 で尋ね出したと、藏屋敷へ持つて行
 くと、長右衛門は呉服所をあげられ

大方首も空へ上り物、これもよから
が、よい共、ヤよう揃うた畜生
めら、おりや幼少から大阪の水濱に
奉公、母者人の咄で聞けば親父殿は
これの御隠居繁齋様のお情で衆樂町
で八百屋商ひ、其縁でおのれまでお
世話、七つの年に信濃屋へ奉公にや
つたも繁齋様、時に悪者の儀兵衛め
が贖侍を頼みにきたは、ア、どう
でもこりや兩家の難儀の筋と推量し
て、悪者仲間へ這入つてたも、此謀
みを聞こう爲ぢやわい、其脇差は矢
張贖物、正眞はコリヤおれが差して
居る、ハアしまうたと、逃げ行く長
吉掴み投げ、勝手をかける母儀兵
衛、其脇差をと取りつくを、猪口才
すなと右左、どつさりこりとお付
ければ、長吉も起き立つて三人一緒

に掴みつき、繁齋お絹も馳出て、様
子は聞いた三人共くくれと云ふ
聲に、こりや叶はぬと三人は行衛知
れず逃て行く、隣のお石がおろく
涙、コレイノウコレくさつきから
お半が居ぬ故尋ねて見れば此書置、
エ、と皆々胸騒ぎ、詞長右衛門様も
何處へぢや知らぬ、ヤアくくと
俄にうろたへ、繁齋は氣をいらち、
詞そちには早ふ其脇差遠洲の藏屋敷へ
後日の言譚證據の三人、追かけて引
つくゝれ、心得ましたとかけゆく五
六門やどや、桂の百姓、米の淵に
二人の身投げ、引上て見れば見知つ
た顔、アノ爰な長右衛門とお半様、
ヤア、それはと皆敗亡、呆れてい
つそ涙も出でず、詞コリヤヤイコリ
ヤ男共女共皆おぢやく、水

の淵が長右衛門へ身を投げたといの
コリヤくコリヤこちの者共も皆來
い、お半が長右衛門さんで長右
衛門が、お半様ぢやといやい、ア、
コレく二人乍らうろたへまい
く、高が水が淵と桂川が心中
ぢやと何を云ふやら譚もなし、何分
早う最後場へと、百姓共に勧められ
家内の男女呼びつれく泣きに行く
こそはかなけれ。

(床本) 道行桂川の段

しらたまかなにぞと人のとがめなば
つゆとこたえてきへなまじ、ものを
思ひのこひごろもそれは昔のあくた
川、これは桂の川水に浮名をながす
うたかたのあはときへ行しなのやの
お半をせなに長右衛門、あふせそ

道行桂川の段

お半
右衛門

娘
右衛門

- 竹本伊達太夫
- 竹本源太夫
- 竹本むら太夫
- 竹本きの太夫
- 竹本土佐子太夫
- 竹本土佐栄太夫
- 竹本土佐夫太夫
- 鶴澤友次郎
- 野澤吉彌
- 野澤吉左
- 野澤喜代之助
- 野澤市之助
- 野澤吉季
- 野澤市松
- 鶴澤友三郎
- 鶴澤猿若郎

人形

ぐはぬあだまくらむすぶ帯やの軒も
はや、こよいかざりに月かげのなが
れてつれてゆく、身には妻にも名残
おしこうじあはれはあとにとほざか
る町をはなれてやうくと、せなを
おろしてとりんにすがたつくらふ
心根はまだ娘氣の後や先、しにゆく
身はつねよりも心ほそみち犬のこゑ
アレみぶでらの鐘のかず、こゝの
つこゝにきたみなみ、とうじのとう
やしゆしやかのゝ火かげかすかに三
すじまち身にしむ風にさそはれて、
コレおはんこゝが三條あたご道、つ
ゆの命のおき所くさばのうゑと思へ
共、みちくもいふ通りおれこそ死
なねばならぬ身の上、四十近い身を
もつて、十四やそらのこむすめと
一所に死だらざり知らずと、世けん

新劇従道に歌舞伎に大衆劇に對陣 他

五月一日初日

毎日 四時半開演
初日 三時半開演

第一初戀 四幕
ユージンオニール原作
村山知義 譯案演出
伊藤 幸一 監置

第二 暫 一幕
歌舞伎
十八番
大藤 摩中

第三 百太郎騒ぎ 二幕
長谷川伸作
春橋 傳 演出
小山一夫 脚置

第四 三人文明開化世相 七景
河竹 默阿 脚置
片居 吾人 演出 脚置

日曜マチネー 十一時より「暫」だけ
除いて上演致します

浪花座

どうとんぼり

特別公演

の人の笑ひのたねぢや、このうらみ
 おきぬがおもはく、とにかくそなた
 はながらゑてなき我があとをとふて
 たも、たのむと斗りいひ残す、そで
 は涙のにはたずみ、おはん涙のつゆ
 ちり程もおまへのむりじやあるまい
 けれど、私しやいやいなそんなその
 ようなどうよくな、としもあかぬで
 はづかしいこのはら帯はどふしやう
 へ、とのごを先へながらへて身二つ
 なりだいたんな、いたづらものぢ
 やあくしやうなぶしんぢうなと人さ
 んの、わらはんしてもだいないか
 そりや可愛のじやないくいのぢや
 ちいさい時からお前をまわしぎをん
 まいりやきたのさん、物見けんぶつ
 あとおふて手をひかれたりおはれた
 り、はだか人形を無理云ふて買ふて

貰たかんざしのすかしたらしてあま
 やかし、可愛がられた親達よりひと
 が尋ねりや長さんがたんといとしと
 いふた時、やんがてめうとにならん
 しよと乳母や丁稚になぶられて、は
 づかしかつた心さだまり事とあきら
 めて、いつしよに死で下さんせと戀
 を立ぬくりんねのきづな、だきつく
 顔と顔男もとこふ涙のふち、共
 にしづまんこなたへと手に手を取り
 の聲つけて、もはや桂につきのあし
 アレ〜うしろに火の光見とがめら
 れぬそのうちにいざや最後と諸共に
 石をたもとに糸と針、しゆすのおび
 やとしなのやの、娘〜と呼ぶ聲に
 見付られじと足早にこけつまろびつ
 うしがせのみななみへとぞいそぎ行
 く。



大坂御茶

茶筌

電話新町二番



尼ヶ崎の段

中 竹本大隅太夫
 鶴澤寛治郎
 切 豊竹古靱太夫
 鶴澤清六

人形

母 さつき 吉田小兵吉
 妻 操 吉田文五郎
 嫁 初菊 吉田光之助
 武智重次郎 吉田玉幸
 眞柴久吉 桐竹紋十郎
 武智光秀 吉田玉藏
 加藤正清 桐竹門造
 軍兵 大ぜい
 百姓 大ぜい

繪本太功記

尼ヶ崎の段
 大徳寺焼香の段

この床本は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒の合作で寛政十一年七月十二日初日の豊竹座で上場されたのが初演、初演の折は發端より十三冊目まで上場されたのが後世何冊目と引抜いて上演されるに到りました。書卸し當時紋下の麓太夫が十冊目尼ヶ崎を語つてゐます。

尼ヶ崎の段は旅僧に身を窺して一夜の宿を乞ひ様子を探りに來た木下藤吉を光秀は刺すつもりで母臯月を刺殺すが母は死を以て我子の不忠を諫めた久吉と光秀は此時潔く再會を約し別れる大徳寺の段は信長、信忠

父子の七々日の法會の焼香の爭論の際秀吉は三法師丸を抱いて之を御家督に推した勝家は秀吉の專横を憤つたが秀吉は大事に際會し勝家、信雄、信孝等の臆病を散々罵つた既に天下を握るの概があつた。

(床本) 尼ヶ崎の段

南無妙法蓮華經〜〜御法の聲も、娟し尼ヶ崎の片邊り詠住む家と夕顔もおのが儘なる軒のつまあたり近所の百姓共茶碗片手に高咄したふ婆様こんな様も見た所が上方で歴々のお衆そふなが何の爲に面白ふもないこの在所へはござつたぞいのア、コレ〜甚作そりやいやんな、京の町は武智といふ悪人が春永様を殺して大騒動、大かた又下へ下つて居や

しやる久吉殿が戻つて来て、武智と是非に一合戦なけりや濟ぬはいのふそんなら年寄はうか／＼京の町には居られぬ、とかくあぶなげのない様に、こんな在所へ来て、居るが大でき／＼、時に近付がてら妙見講を勤るとはよい手廻し大きな馳走に逢ました是から随分心安いたしませうサア／＼いふと口々に言たいことをたくしかけ、しやべり廻つて、歸りける、老母はつど／＼門送り庭の千草に打つ水も、たもつ葉毎に、風かほる軒を自當にくる人は武智が聞に咲く花の採の前は家來を遠ざけ、嫁の初菊伴ふて窺ふ切戸の庭先に花に心を養ふ老母、それと見るより手をつかへ後室様の見舞として只今參上致せしと慇懃に相述る詞に老母は

打笑み、ヲ、珍らしい嫁女孫はる／＼の道よふこそ／＼さりながらせがれ光秀當月二日本能寺にて主君を害せし無法者、同じ館に陳ならぶにも先祖の恥辱身の汚れと館を捨て此在所へ身退きし此婆を見舞とはむこがましい善にもせよ惡にもせよ夫に付が女の道操の前は武智十兵衛光秀が妻、そなたは又孫の十次郎光慶が嫁でないか生死別なら戰場へ趣く夫を打捨て浮世を捨てた姑に孝行盡すは道が違ふ妻城にとゞまつて留守を守るが肝要ぞや、モウやもめぐらしの樂しみにには夕顔根の下涼み捨つべきものは弓矢ぞと言放したる老女の一徹、後とは詞もなかりけり、常の氣質とさからはず、いかさま後室様のおつしやる通り此様に只お一人ござ

つたら何もかも氣さんじでマア第一はお身の養生今から私も初菊も後室のお傍に居て飯も焚たり茶も沸しお宮づかへをせふぞいのと、ありあふ前垂襪の上に引しめ茶釜の傍、端香のこもる姑のしぶ／＼機嫌を取りかねる、娘心に初菊もマど濟事か濁り井の深き奇縁の釣瓶繩水汲み上げんと立寄れば、コレ／＼嫁達シテ孫十次郎は城に残て居めさるか、さればでござります、十次郎が願ひにはどふぞけふの軍に高名手柄があらはしたいと父上までは願ひしかど、婆様のお救しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれと、くれ／＼の願ひ故餘り健氣さ祖母様に御機嫌の程いかゞと窺ひに参りましてと語る内老母は涙をはら／＼と流

し、ヲ、うるさの嫁がもの語り、主
 を討たる逆賊の邪非道の軍の評定
 聞かぐいやさのこの住居が又孫をば
 めるではなけれ共非道な倅光秀が子
 に十次郎といふ武士が生れてくれる
 とは是も回縁、悔んで、返らず、戦
 場の事聞きたふないア、いや／＼情
 けなの浮世やと、無量の思ひ百八の
 数珠つまぐつて居たりける、折ふし
 表へ草鞋がけ風呂敷香にいつきせき
 蛙飛込道野邊の清水むすばん夏の旅
 西方もどきの僧一人、門口に立休ら
 し諸國修行の一人旅、近頃申し兼た
 れど御宿の報謝に預りたし押付なが
 らと言入る聲を老母が聞取て、見苦
 しうござりますれどお心おきなふ御
 一宿、それは千萬忝い左様ならば
 御遠慮なしに御免／＼と上り口、腰

打かくれば二人の女、草鞋の紐を解
 かゝればア、勿体ない／＼構ふて下
 さりますな、旅仕つけた坊主の氣さ
 んじ、木納家の隅でもついころり蚊
 帳も蒲團も入ませぬ、お心づかひ御
 無用と、詞半へ表口、人目を忍び
 只一騎窺ひ立聞く武智光秀心得がた
 き旅僧と、生垣押分けさし覗き思は
 ず見合す母の顔老母は何か心にうな
 づきヲ、わしとした事が心の付ぬコ
 レ御出家様此板圍ひが則ち風呂場、
 水は幸ひくんであり、ついばや／＼
 ともやして、あついつ分じや行水し
 て休んで下さりませ、婆も後で相伴
 じませふ、マ、イヤそれには及びま
 せねど相伴とあれば沸しませう、そ
 んなら御免なされませふと包み引き
 げ氣さんじに、湯殿をさして入にけ

る、味方の軍卒兩手をつき、御子息
 十次郎光慶様後室様に御願ひの筋あ
 りと只今是非へ御越といふ間程なくし
 づ／＼と家來に持せし鏡櫃かき入れ
 させて打通りコレヤ／＼者共そち違
 に用事はない、陣屋へ早くとおつ立
 やり、威儀を正して兩手をつき母様
 をもつて御願ひ申せし出陣、御聞き
 届け下されなば、武士の本意と十次
 郎思ひ込でぞ願ひける、老母は見る
 より、機嫌顔ヲ、めづらしい十次郎
 出陣の願ひとな、倅を見限り此所へ
 身退きしに叮嚀な願ひの筋最前嫁女
 にくはしう聞きました。とても出陣
 仕やるなら婆が願ひはこの初菊、今
 宵此家で祝言の盃してから門出し
 や、何と嫁女嬉しいかと、老の詞に
 初菊は飛立つばかり氣もいそ／＼心

の悦び穂に^ほ出る顔は上氣の夏楓色もなまめくばかりなり、只黙然と十次郎^{じゅうじ}けふ初陣に討死と覺悟極めしこの體、お暇乞に參りしと、知らせ賜はぬ悲しやと涙谷込忍び泣操の前も立上りば、様の御機嫌のかはらぬ内にかための盃、ヲ、それ、孫も大かた心せき操は九献の用意しや、十次郎が初陣の鎧の役はすぢに花嫁、三國一の悲しみと知らぬ白齒の孫嫁が手を引連れて三人は奥の。

M 一間に入りけり。残の蕾の花一つ、水上かねし風情にて、思案投首しほるばかり、やうく涙押とどめ母様に^{ははさま}もばゞ様に、これ今生の暇乞ひ、此身の頼ひ叶ふたれば、思ひ置く事更に無し、十八年が其間御恩は海山代難し、討死するは武士の習ひと思召し分られて、先立つ不幸は救してたべ。二つには又初菊殿未祝言の盃をせぬが、互ひの身の仕合せ、わしが事は思切り、他家へ縁付して下され、討死と聞くらばさこそ數かんと慍やと、孝と戀との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立附く涙轉び出で、わつとばかり泣き出せば、はつと驚き口に手をあて。ア、コレゝ聲が高い初菊殿、抜て様子を。アイ、残らず聞て居りました、夫の討死遊はすを、妻がしらいで何とせう二世も三世も女夫ぢやと思ふて居るに情ない、盃せぬが仕合せとは、あんまり聞えぬ光義様、祝言さへもすまぬ内、討死とは曲がない、わしやなんぼうでも殺しはせぬ、思ひ留つて給はれと、すがり歎けば。ア、コレ此方も武士の娘ぢやないか十次郎が討死は豫ての覺悟

ばゞ様に泣顔見せ、もし悟られたら、末永々縁きるぞや。エ、。サア、とかう云ふ内時刻が延る。其鎧襖爰へ愛へ、アイゝ、サ早う、時延びるほど不覺のもと、聞譯ないといられて、いとしい夫が討死の、首途のもの具つけるのが、どう急がるゝ物ぞいのと、泣くゝ取出す緋織の、鎧の袖にふりかゝる、雨か涙の母親は、白木に土器白髮のばゞ、長柄の銚子蝶花形首途を祝ふ慶斗、昆布、結ぶは親と子手脚當、六具かたむる三々九度、合此世の縁や割子札、猪首に着なす鎧形の、あたり葎はゆき出立は、さわやかかなりし其骨柄。オ、天晴れ武者振いさまし、功名手柄見る様な、祝言と出陣を一結の盃、サア早う、目出度いゝ、嫁御察と、悦ぶ程猶いや憎す名残り

こんな殿御を持ちながら、これが別れの盃。かと悲しき隠す笑ひ顔、随分お手柄功名して、せめて今宵は凱陣をと、後は得云はず喰ひしぼる、胸は八千代の玉椿、散りてはかなさ心根を、察しやつたる十次郎、包む涙の忍の緒、しぼり兼たるばかりなり。哀を爰に吹送る、風が持てくる攻大鼓、氣をとり直しつゝ立上り、いづれも、さらばと言ひ捨て、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らず成にけり。ノウ悲しやと泣入る初菊、母も操も顔見合せ。ばゞ様、嫁女、可愛やあつたら武士を、むざん、殺しにやりました、なる初菊、十次郎が討死の出陣とは知りながら、なま中留めて主殺しの、憂死恥をさらさらより健氣な、討死させん爲祝言によ

そいへ盃さしたのには、暇乞やら二つには、心残りのない様と、思ひ餘つた三々九度、婆が心のせつなさを推量しやとばかりにて、初めて明かず老母の節義、きく初菊も母親も、一度にどつと伏轉び、前後不覺に泣叫ぶ、襖押し明け何に氣無う、つかいづる以前の旅僧、コレ、かみ様、風呂の湯が沸きました。どなたぞお道入りなされませと、云ふにこなたは、泣顔かくし。オ、それは御苦勞去りながら、年寄に新湯は毒、後は若い女共、マアお先へ御出家から。いかさま、湯の辭義は水とやら、左様ならば御遠慮なく、お先へ參る、と立上れば、三人は涙押包み奥の仲間と湯殿口、入るや月もる片びさし。爰に刈取る眞柴垣、夕顔棚

のこなたより、現はれ出たる武智光秀。必定久吉此内に、忍び居ること屈竟、只一討と氣は張弓、心は矢竹籤垣の、見越の竹をひつそぎ鎗、小田の蛙の啼音をば、とゞめて敵に悟られじと、拔足差足、窺ひより、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の槍先に、わつと魂ぎる女の泣聲、合點ゆかずと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒ヤアこは母人か、しなしたり、残念至極とばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり。聲聞つけてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様が情けない、此有様は何事と縋り歎けば目をみひらき歎くまい、歎くまい、内大臣春永と云ふ主君を害せし武智が一類、か

くなりはつるは理の當然、系圖正し
き我家を逆賊非道の名を穢す、不幸
者とも悪人とも、たとへがたなき人
非人、不義の富貴は浮べる雲、主君
を討つて功名顯、たとへ將軍になつ
たとて、野末の小屋の非人にも、お
とりしとはしらざるか、主に背かず
親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば
もつそう飯の切米も、百萬石に増る
ぞや、おのれが心只一つで、しるし
は目前これを見よ、武士の命を斷つ
刃も多いにこのやうな、ひつそぎ竹
の猪突槍、主を殺した天罰の、報
ひは親にも此通りと、槍の穂先に手
をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負
妻は涙にむせ返り、これ見給へ先秀
殿、軍の首途にくれ、お諫め

申しした其時に、思ひ留つて給はらば
かうした歎きはあるまいに、知らぬ
事とは云ひながら、現在母御を手に
かけて、殺すと云ふはエ、マ、何事
ぞいの、せめて母御の御最後に善心
に立かへると、たつた一言聞かして
たべ、拜むわいのと手を合はし、諫
めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣
き、襟の鏡曇りなき涙に誠あらはせ
り。光秀聲あららげ、ヤア猪小才
な諫言立、無益の舌の根動すな、意
根を重ぬる小田春永、勿論三代相恩
の主君でなく、我諫を用ゐずして、
神社佛閣を破却し、惡逆日々に増長
すれば、武門の習ひ天下の爲、討
取たるは我器量、女童の知る事
ならず、すさり居らうと光秀が、一

心變せる勇氣の顔色、取つく鳥もな
かりけり。折しも開ゆる陣大鼓、耳
をつらぬく金鼓の響、きははやと見
るや表口、數ヶ所の手紙に血は瀧津
瀬、刀を杖によるばひく、立歸つ
たる武智が一子、庭さきに大息つき
親人これにおはするや、云ふも苦
しき斷末魔、見るに驚く母親より、
娘は傍に走り寄り、のういたわしや
十次部様、祖母様と云ひお前迄此有
様は情けない、お心たしかに持つて
たべ、やいのくんと取付て、介抱如
才泣くばかり。光秀わざと聲あらま
げ。ヤア不覺なり十次郎、仔細は何
と、様子はいかに、具に語れと呼
はれば、はつと心を取直し。親人
の差圖にまかせ、手勢すぐつて三千

餘騎、濱手のかたに陣所をかため、
 今や歸國と相待つ所に、敵はそれと
 も白浪の、橋を押し切つて陸地に漕付
 け、おい／＼都へ馳せ登る、眞柴が
 軍勢ござんなれと、鬨をつくつて味
 方の軍兵、縦横無盡に難立つれば、
 不意を打たれて敵は敗亡、狼狽騒ぐ
 を追詰め爰をせんと、戦ふ中後の方
 より大普上、眞柴築前守久吉の家臣
 加藤正清これにあり、逆賊武智が小
 童共、目に物見せてくれんずと、い
 ふより早く太刀抜かざし、四角八面
 に切立てられ、また／＼間に味方の
 軍卒、殘らず討死仕り、無念乍も
 只一騎立歸つて、候と、息つきあへ
 ず物語れば、光秀怒りの髪逆立て、
 ヤア云ひ甲斐なき味方の奴原、シテ
 四方天田島頭は、さん候、四方天は

目ざすは久吉一人と、昨朝よりの一
 騎がけ、亂軍なれば生死の程も、慥
 にそれと承らず、親人の御身の上、
 心にかゝり候故、未練にも敵を切
 り抜け、これ迄落延び歸りしぞや、
 此所に御座あつては危ふし／＼、一
 時も早く本國へ引取り給へ、サ早く
 くと、深手を屈せず父親を、氣つ
 かう孫の孝行心、聞くに老母はせき
 兼て、アレあれを聞きや嫁女、其身
 の手疵は苦にもせず、極悪人の悴め
 を、大事に思ふ孫が孝心、やい光秀
 子には不慰にはないか、可愛いとは思
 ぬかやい、おのれが心只一つで、
 いとし可愛の初孫を、忠と義心に健
 氣なる、討死でもきす事か、逆賊無
 道の名を汚し、殺すはなんの因果ぞ
 と。せぐり苦しき老の身の、聲聞き

つけて十次郎、ヤアそんなら祖母
 様には、御生害遊ばしたが、今生の
 お暇乞今一度お顔が見たけれど、モ
 ウ目が見えぬ、父上母様、初菊殿、
 名残り惜やと手を取つて、姉春の別
 れ愛着の、道に引かゝるいぢらしさ
 母は涙に正體なく、討死するも武士
 の習ひといへど情けない。詞十八年
 の春秋を、双の中に人となり、いつ
 樂しみの隙も無う、弓矢の道に日を
 ゆだね、今日の前途の其時にも、母
 様今日の初陣に、天晴れ功名手柄し
 て、父上やば／＼様に、響らるゝのが
 樂しみと、につこと笑ふた其顔が、わ
 しや幻にちらつて、得忘れぬと
 くどき立て、くどき立つれば初菊も
 ほんに思へば此身ほど、はかない者
 が世にあらうか、解けて逢ふ夜のき

ぬくも、永き名残の許嫁、二世を結ぶの枕さへ、かはす間もなう此様な、悲しい別れをする事は、マどうした罪か情けない、私も一所に殺してたべ、死にたいわいのと身をもだへ、互ひに手に手を取かはし名残涙のいとま乞ひ、見るに目もくれ情消え、母も老母も聲をあげ、わつとばかりに取亂せば、流石勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の間、輪廻の絆にしめつけられ、こたへかねてはらくはら雨か涙の汐浪立ちさわぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲かまびすくM 手にとる如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立ち上り。アノ物音は敵か味方か、勝利いかにと庭さきの、掘木の松ヶ枝踏しめくよぢ登り、眼下の村手をきつと

見くだし。和田の岬の弓手より、追々つゞく數多の兵船間、近く立つたる魚鱗の備へ、千成飄の馬印は、疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃げのび、手勢引具し光秀を、討取るでだてと覺えたり。と云ふより早くひらりと飛下り、草履掴みの猿面冠者、イデオトひしぎと身纏ひ勢ひ込んでかけ出せば。ヤア武智光秀暫く待て、眞柴築前守久吉、對面せんと呼はつて、三衣にかはる陣羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然として立出れば、光秀見るより仰天し、駈戻つてはつたと睨み。ヤ、珍らしし眞柴久吉、武智十兵衛光秀が此世の引導渡してくれん、觀念せよと詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の子故に手疵屈せぬ老女、ノウ久吉様

我が子に代るこの母も、天命のがれぬ引そぎ槍、つくきり罪の萬分一、亡る事もあらうかと、思ひ餘つた此最後、武智が母は逆礮付に、懸つて無慘の死を遂げしと、末世の記録に残してたべ、それも矢張惚れが、可愛さ故の罪亡し。うるさの娑婆に殘らんより、孫と一緒に死出三途、ハア私もお供いたしまする、いづれもさらば、おさらばと、未練未さぬ武士の花も實もある此世の別れ、今ぞはかなくなりけり。操の前も初菊も更に詞も出でばこそ、あへ亡骸を推動かし、天に憧がれ地に伏して、歎く心ぞいぢらしき、哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打ち向ひ、俱に天を戴かぬ亡君の弔ひ戦、今此所で討取つては、義あつて男を失ふ道

大德寺燒香の段

眞柴久吉 眞柴久盛 眞柴久吉
 佐久間盛政 佐久間盛政 佐久間盛政
 蘭川の將監 蘭川の將監 蘭川の將監
 瀧川將監 瀧川將監 瀧川將監
 左枝徳仙 左枝徳仙 左枝徳仙
 加藤正清 加藤正清 加藤正清
 福島正達 福島正達 福島正達
 公達

人形

蘭の勝家方 蘭の勝家方 蘭の勝家方
 柴田の勝家方 柴田の勝家方 柴田の勝家方
 佐久間盛政 佐久間盛政 佐久間盛政
 小田春孝 小田春孝 小田春孝
 小田春信 小田春信 小田春信
 眞柴久吉 眞柴久吉 眞柴久吉
 加藤正清 加藤正清 加藤正清
 福島正達 福島正達 福島正達
 左枝徳仙 左枝徳仙 左枝徳仙
 三枝徳仙 三枝徳仙 三枝徳仙
 大枝徳仙 大枝徳仙 大枝徳仙

竹本文字太夫 竹本文字太夫 竹本文字太夫
 豊竹和泉太夫 豊竹和泉太夫 豊竹和泉太夫
 竹本長尾太夫 竹本長尾太夫 竹本長尾太夫
 竹本源太夫 竹本源太夫 竹本源太夫
 豊竹番路太夫 豊竹番路太夫 豊竹番路太夫
 豊竹千駒太夫 豊竹千駒太夫 豊竹千駒太夫
 竹本隅榮太夫 竹本隅榮太夫 竹本隅榮太夫
 竹本常子太夫 竹本常子太夫 竹本常子太夫
 豊澤廣助 豊澤廣助 豊澤廣助

桐竹紋太郎 桐竹紋太郎 桐竹紋太郎
 吉田玉藏 吉田玉藏 吉田玉藏
 吉田玉作 吉田玉作 吉田玉作
 吉田玉市 吉田玉市 吉田玉市
 桐竹紋司 桐竹紋司 桐竹紋司
 信田文之助 信田文之助 信田文之助
 桐竹紋十郎 桐竹紋十郎 桐竹紋十郎
 桐竹紋門徳 桐竹紋門徳 桐竹紋門徳
 吉田光之助 吉田光之助 吉田光之助
 吉田玉之助 吉田玉之助 吉田玉之助
 大枝徳仙 大枝徳仙 大枝徳仙

り、諸國の武士に久吉が軍功を知ら
 さん爲、時日に移さず山崎にて、勝
 負の雌雄を決すべし、がいかにか
 オ、流石の久吉よく云つたり。我も
 惟任將軍の勅許を受けし身の本懐、
 一トまづ都に立歸り、京洛中の者共
 へ地子を許すも母への追善、互ひの
 運は天王山 洞が峠に陣所を構へ、
 只一戦にかけ崩さん、首を洗つて觀
 念せよ、ホ、ホ、ホ、何さ、
 たとへ項羽が勇ありとも、我又孫吳
 が秘術をふるひ、千變萬化にかけな
 やまし、勝鬨上るは阿く中と久吉が
 詞はゆるがぬ大稀石、忽ち廻り小栗
 柄の、土に哀を残すとは、知らず知
 られぬ敵味方、睨み別る二人の勇者
 二世をかためのおれの涙、かうれと
 てしもうば玉の、其黒髪をあへなく

も、切拂ふたる尼ヶ崎、菩提の種と
 夕顔の、軒にあらめく千生飄箒、駒
 のいなき迎ひの軍卒、見渡す沖は
 中國より、追々入來る數萬の兵船、
 威風凜々凜然たる、眞柴が武名假名
 書に、寫す繪本の太功記と、末の世
 までも 三重残しける。

大德寺燒香之段

入にける、澄渡る、花降る臺法
 の縁 今はずがりの切髪も、浮世の
 塵と捨て給ふ、春長公の後室蘭の方
 中央に座し給へば、左の席は柴田修
 理の進勝家古老の威風、大紋の肩肘
 いからす我慢の面、右に連る眞柴筑
 前の守久吉胸に四海を、治たる大器
 の武士、其外諸侯列席に口を閉てぞ
 控へ居る、後室御聲うるはしく、此

度我君不慮の御逝去、是に依て御家督の儀、各よきに評定をと、詞少く流石にも心餘りて見へ給ふ、修理之進す、み出、ハ、後室の御意の如四海の武將たる尾田の御家督、捨置がたき一大事、殊更隙を伺ひ軍馬を出さんと付狙ふ武田、北條、西國、四國の族、是等を防ぐ御器置は、御連枝の春信殿か春孝殿の御兩所に有今日は春長公の御後目の評定なれば遠慮は却て不忠、何れも御家の爲、別心なく申出されよと、云も互ひに探り合胸の算段勝家は、己が掛算術はづさぬ巧の底意ぞ是非もなき、久吉は詞を正し、何れを何れと分がたき、御連枝、此義は只老臣の御心に有べき筈、去ながら先後室の御了簡いかゞと相述べれば、イヤ自は女

の事、兎角頼は、そち違斗りわらは座席を開きませう、後にてよきにと御席を、立せ給へば一統に、頭を下て禮を述、諸侯に會釋靜々と、御座の間へこそ入給ふ、柴田は上座にむづと居直り、各方御所存の程申されぬからは、御一同に御承知と相見ゆる、左様でござるか、後日違變はござらぬか、左様ならば、春信殿は兄君なれ共柔弱にして其器に有ず、差詰、御舍弟春孝殿是則尾田の御後目、後見は斯申古老の拙者、各々一つ流以來は左様心得られよと、人もなけ成勝家の、詞にはつと領掌し皆萬歳を祝しける、勝家は思ふ壺、悠々と悦氣の顔色、扱々先頃より、御家督いかゞと心を痛め申たに、早速の得心、四海太平の吉瑞、併ながら

眞柴氏、足下彼木下藤吉と云し草履綱の砌より、何事にても能差出られたる猿智慧成が、今日の評義、一言をも出されぬは、定て心中に仔細有ての事ならん、何を申も老人の勝家老ては愚に歸るとやら、サ、所存有ば心置なく承わらんと、探る一物押隠し、ハ、イヤモ主君に放れ某も、心ならざる折に幸、力と頼は柴田公、春孝君を補佐し奉り、四海の政道を預り給はる古老の貴殿、則我々が主人も同前、否むべき様や有ん、只宜しくと斗りにて思ひ入たる其有様ナニ此勝家を、主人同前に思わつしやるとな、アノ主人同前に、ハ、ハ、ハ、ハ、其一言を承わつて安堵致した、ハ、ハ、ハ、ア、ヤレ

〳此程の心遣ひで、氣の凝かア肩
 が詰つて、イヤハヤ甚だ鬱症、ヲ、
 誠や足下二合半の其時分、折々は導
 引をお頼申たのハ、今にては二
 ケ國の城主、ア以前ならば按摩をお
 頼申さんに、ハテ残念、と上見ぬ鶴
 久吉につこと打笑、御意の通、移れ
 ば變世の中、の夢にも忘ぬ昔の勤
 ヤ久しぶりで勝家公、お肩の療治仕
 らんと素袍の袖を勿上て、立寄ば、
 スリヤ按摩を致しくれられふと、
 な、ハ、ハ、某は千萬、忝い、然ら
 ばお頼申そらかいア、何れも、御免
 下され、ヤエイ、横にころりと肘枕
 後に廻る久吉が、按摩取より天下取
 胸の大輩及びなき、大丈夫とぞ見へ
 にける、並居る諸侯は手に汗握り、
 柴田が不禮目引、袖引きまやけば、

次の一間に正清が、すはと云ば切て
 出んず顔魂こなたの襖細目明、鬼と
 呼れし盛政が、相圖を待て一射と守
 詰たる、不敵の顔色、ヤレヤレ久吉
 殿のお手際にて、大分和らぎ申た、
 御苦勞次手にチト、腰をお頼申
 と飽迄根強不禮の詞、こたゆる久吉
 無念の涙、正清はたまり兼飛で出ん
 ず氣のはやりを、出まい〳〳〳ぞ
 ナニ出まいとは、何が出まい、イヤ
 出まいと申はハ、御持病の肝癩、
 こいつが出るのと彼胸先へ差登り、御
 老鉢を、くるしめる、こう撫おろし
 て胸をさすり、堪忍が一大事、久吉
 モウ療治は頼申さぬ、エ、取置召れ
 と起上つて膝詰かけ、最前より見れ
 ば、無念の顔色、我面鉢へ、こほれ
 かよりし涙の一滴、左程口惜く思は

ど、年こそ寄たれ鬼柴田、瓶割柴田
 と名に呼れし、腕に覺の此勝家、サ
 ア立上つて勝負せよ、奇怪至極と居
 丈高、少しも動ぜず意義を改、是
 は又勝家公のお詞共覺へず、老たる
 を敬は父母の如し、某藤吉奴の
 砌、折々は貴殿の腰をさすりに其
 時は骨組肉合、天晴の蒙傑成しに、
 暮行年の雪積り、御面鉢には浪打皺
 衰へ給ひし御有様、見るに思はず世
 の末の、頼すくなき心の當惑、不禮
 は御免と差うつむき、漸落涙にく
 れければ、さし者の勝家理に伏し、
 ア、年寄ば、とかく物角が立つ、何
 事も年に免して御免々々、ヤ是は格
 別、大切な御家督是よりは本當にて
 御燒香仕ふ、イヤ何れもと勝家が
 鬼を欺く其勢、ハツト従ふ一座の

諸侯、眞柴が胸の廣縁傳ひ奥殿へこそ入りけり。佛殿には得ならぬ匂ひ、薰しわたるは蘭著待、金銀珍花玉盤の雲井になびく雅量、父鳳羽重る大小名烈を亂さず相詰る早燒香の刻限ぞと知せに隨ひ前田徳仙院、巻物捧げ立出れば鳥帽子狩衣さはやかに御連枝打連出給ふ、續て柴田修理之進勝家、瀧川將監威勢に力む、佐久間盛政いかつがましく座に直り、ヤアヤア徳仙院殿御公達御揃ひ遊ばさるゝ上は、御燒香付早く讀上召れ何とく、ヤア拙者斗に物を云せ一言の返答もないは、ハア、エ、コリヤ何か、尊になられしか、但は唯かヨイ、某讀上で取せんと、立上るを柴田押へてヤレ待玄蕃、徳仙院殿が讀上かぬるも尤々、御兄弟の

御中と云共、一二の燒香は何れか前後と差控へられしも理りかな、何と瀧川殿、御互に念なき様、御兄弟一ツ所の拜禮こそ、亡君にも嘸御満足左は思さぬや將監殿、成程々々、某逆も其事を當惑せしが、御一所とはよき御差圖、然らば春信公、春孝公御同行にて御燒香遊ばさるべし、と敬ふ兩將、こなたも互に威義を正しイカニモ大老の差圖に隨ひ、御燒香仕らん、ハ、辭するは却て尊靈への恐れ、春孝殿、春信公、イサ、御所に柴田、瀧川、玄蕃も來れと、禮前へ、向わせ給ふ後の方、天地も響大音上、ヤアく、何れも燒香暫く無用、眞柴筑前之守久吉申附する仔細有待れよやつと聲を欠、幔幕さつとしばらせて、内に威風の眞柴久吉、

耀東帶悠然と、幼君三法師丸を守護し奉り、立出給ふ左右には、兩に翼の加藤、福島、眼を配つて立たる有様目覺しくも又、ゆゝしけれ、柴田、瀧川怒氣逆立、ヤア無禮なり久吉、御公達さへ鳥帽子狩衣を召れしに、臣下の身として東帶に冠をかけしは、どなたの赦其上三法師丸殿御家督の御名は有ど、太平の代と事替、幼君の御身を以て戰場の掛引、ヤ思ひも寄らず及ばぬ腕立取置て、似合様に草履を掴め、アノ爰な素丁稚野郎め、大老を差置て、憚もなき上席、尾籠千萬、ヤア下れく下れ眞柴と佐久間が惡言、久吉寛然と見下し給ひ、ホ、漢の高祖は肺縣の匹夫より出て王位に登る、某下賤より經上る云共、軍功に依て大國を

領し、諸侯の烈に連り、眼前亡君の仇を討取たるが故に、忝くも天子より官職を下し給わり、三法師君を守立、勅命によつて禁庭の守護人なり、夫に引替、俱に天の戴かざるの敵に矢の一本も放たず、安閑と榮花に耽る不幸不儀の春信、春孝、又尾田の大老職として、莫大の高恩を受ながら、山崎の弔ひ合戦に馳向かず、不忠無道の卑怯者、大腰拔の柴田勝家、まつた本能寺の大變を聞應じして間道を逃さまよひ、東に潜憶病末練の瀧川將監、皆々其期に及んで、武智光秀が武勇に恐れて上洛せず、第一春長公の鬱憤を晴らし奉らず、おめくくと在國なしたる空氣者、寸功もなくて猥り廣言を吐、傍若無人の佐久間玄蕃、汝等、何の顔

面か有て靈前へ罷出るや、イヤサ亡君へいか成申譯有て焼香するや、我君にかわつて此罪を誑す所なり、返答有ば承らん、久吉が詞よどまぬ天下の棟梁、類希成太功の威勢、そなわり見へにける、ヤア〜者共申付置たる、不忠不儀の彼等へ馳走をせよ、早く〜、はいと一度に相圖を定め山々谷々、鳴渡りあたりに閃くはた差物筒先揃へ大庭に、取極みず紙鐵砲、膝もわな〜兩大将、差もの勝家、將監、佐久間、大小名も顔見合せ、呆果たる斗りなり、強氣の柴田高笑、ム、ハ、ハ、ハ、ヤ工んだり拵へたり、張筒を打て御公達方をおびやかし一番に焼香せんず謀斗、遠巻の軍勢は見せかけならんエ、斯様な事に御心を痛られずと、

何れも御焼香、瀧川殿も御供と、皆立上るを眞柴久吉、はつたとねめ付ヤア、某が詞を背くは違勅の科、ソレ加藤、福島下知なせよと主君の仰に勇立、先刻は勝家公、主人久吉に導引の御所望下され満足せり、返禮には我々が主人に替つて導引役不調法も御一興、ヲ、サ〜此福島が手並の程、首筋元から爪先迄揉こなしてくれんと、立ち、ムれば、同正清大手を廣げム、ムハ、ハ、ハ、我々が導引は柴田殿御一人では喰たらず、瀧川殿にも相伴有、取持顔する佐久間玄蕃、胴骨肩骨、入かへ、差かへほつき〜踏和らげて取せん、勇猛不敵の虎之助獅子の勢、福島に詰寄せられて將監、佐久間、是迄なりと大太刀にかくる兩手を押へる柴田ア

レ待れよ、爰をいづれと思わるゝ、
コレサ大切成御法事の塲席をも辨ふ
ず、私の宿意を立んと血をあやせ
ば、先君の御靈前を穢する恐れ、其
のみならず、勅命に背かば朝敵同前
等と舌頭にかけれれば、先非を悔
ても、返らぬかや、日頃に似合ぬ將
監殿、玄蕃鎮れ、ハテサテ待と云に
コ、ナ、狼狽者、諸事柴田が胸中に
ナ合點いたかと制せられ、立にも立
れず抜かけし、柄も碎くる齒きしみ
齒切、顔見合て兩人は、五臟揉切無
念の拳、礎ゆるぐ斗なり、久吉公
はしづゝと三法師丸を誘引參らせ
御手を持添御焼香、佛拜なさせ奉
り、元の座席へ押直る、第二番の御
焼香眞柴筑前守久吉公と、聲高々と
呼はれば、また無念に逆立兩人、制

する柴田修理へ進、瞬もせず虎之
助目配り氣配り福島も、すわと云ば
大筒の火蓋を切んと待かけたり、威
義よふゝと眞柴久吉早靈前へ向わ
せ給ひ、在が如禮をなし、涙の露
はらゝゝ、くゆらす煙、名香の
匂ひは四方に芳ばしく、席を、譲り
て座に着給へば、徳仙院聲を上、第
三番の御焼香春信公、同じく四番春
孝公、古老の方々も、御焼香遊ばさ
れよと、呼出されて三人が、満座の
恥辱重なる無念、中にも柴田が怒りの
大音いかに久吉、冠裝束功にきて、
前後の焼香争ふ共大切の法會なれば
此座は此儘勝家が用捨を以て差赦す
後日の再會其時は、今着したる冠諸
共、汝が首を捻切て道の街にさらし
てくれん、其を土産にく早立去、ホ

、我又汝が白髮首、雪に埋むは北國
の、地の利を照す天ケ下、民百姓に
恵みを見せん、國へ歸つて用心せよ
互の目に角賢將勇將、睨み別るゝ瀧
川、佐久間、加藤、福島守護する若
君、羽柴が智略、量りなき、大徳寺
院の弔ひに薰ずる名香名將と、今の
世迄もかんばしき。

文樂座御使用について

當文樂座は休演中諸種の御催物のため御使用に應じます。

例へば演劇公演、音樂會、舞踊公演お渡ひ溫習會披露會、祝賀會、慰安會などには最も相應しい華やかなステージで、場内殆んどが座り心地良き椅子席、明るい照明等で冷風換氣完備に防音装置の近代的設備明朗な喫煙、御休憩室など至極豊かに、御來場の際しても大大阪の中央四ツ橋畔に位置なし交通の便は申分なく最も適當な會場と存じます。何卒御利用の程御願ひ申上ます。

尙御使用についての詳細は當座事務所にて御問ひ合せ下さい。充分御便宜御相談申上ます。

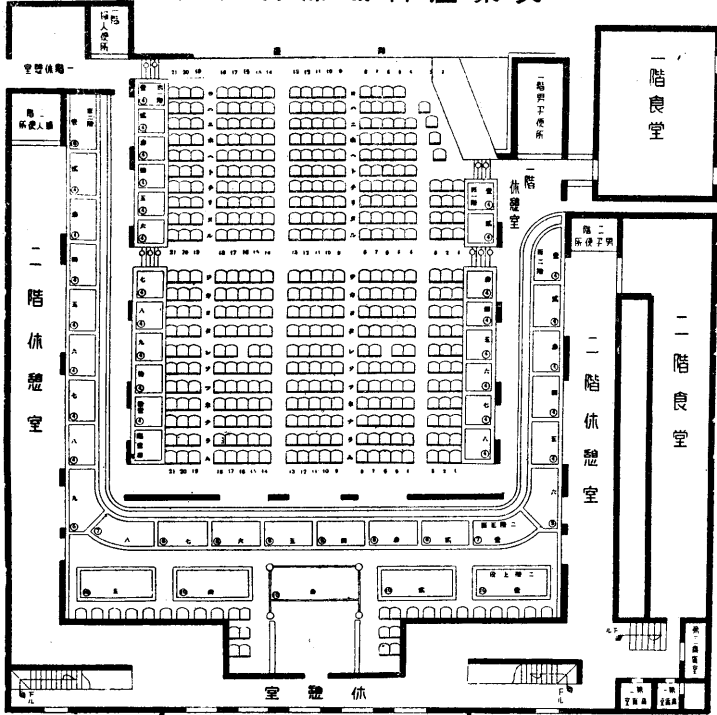
四ツ橋畔

文樂座

電南①四七一一番



文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は
 五日前から發賣致します、ま
 た五日以後のお切符も壹等席
 に限り御豫約申し上げますか
 ら上圖の座席表に依つてお早
 く御望みの御場席をお申し込
 みになればお心のまゝにお好
 きな處が御自由にとれます御
 用命の節お呼出しの電話は
 南四七一一番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります
 二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人情淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開演毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと、一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お子帽は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お席席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ますから御使用下さい。ムシタオルはレイトローション使用致して居ります。

お出口は 下足礼赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人 其他の一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出演不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めしますから豫め御承願ひます。

◇皆様へ御案内

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演・當座休演中いろいろの御催しの爲劇藝御使用等あらゆる御相談に應じ、よろづ御案内申上げ事に致しました。御一報次第參伺、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 田中 茂

よろづ案内係 古賀 文吉

昭和十二年四月廿八日印刷
昭和十二年五月一日發行

發行所 松竹株式會社大阪支店

大坂市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
編輯兼 烏江 鏡也

大坂市西區土佐堀通一丁目十二番地
印刷所 永井日英堂印刷所 金十五錢

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前に御下賜命はばれば至極御便利で御座います



大阪で一番早起きの南一

南一温泉料理

大阪四ツ橋

御宴會にも
御家族連にも
料理は
南一

文樂座南一食堂

電話南

①

三三三七
三三三〇
四二一一
番番番番





お買物は

(場資階一) スピーサ朝早

店開時七前午り限に日祭・曜日
ムルイフ真寫・子葉お・當辨お

ルーホヤビ軌大

一均錢五十理料品一
でま時十後午りよ時一十前午

一部 (金十五錢)

大 軌 百 貨 店

六 上 ・ 阪 大